

平成26年1月号～平成27年3月号掲載分

復興まちづくりの スタート

.....
共に歩みを進める、
ふるさとの再生に向け

この時期の復興に向けた主な動き

- H26. 2月 町内の井戸水・沢水等の放射性物質モニタリング検査開始
- 3月 復興まちづくり計画を策定
- 4月 県営復興公営住宅の第一期募集が開始
- 5月 水稲実証栽培を開始（町内で4年振りの田植え）
- 8月 平成26年度浪江町住民意向調査を実施
- 12月 浪江町防犯見守り隊（町民で構成）のパトロール開始
- H27. 3月 町営大平山霊園が完成
- 3月 常磐自動車道が全線開通（浪江IC～常磐富岡IC間開通）



津島小学校再開（4月7日）



川添芸能保存会の活動再開



警察と常備消防の常駐開始（4月1日）



浪江町防犯見守り隊の発足（11月27日）



東京都

鎌田理恵子さん（権現堂）

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：12月5日 「平成26年1月 広報なみえ掲載」

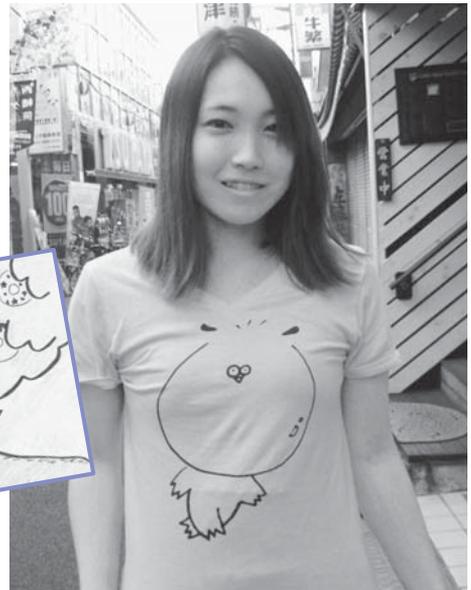
一緒にがんばろう！ というメッセージを歌で伝えたい

シンガーソングライター『理恵子』として、東京を拠点に、福島と東京でライブ活動を行っている理恵子さん。「父母や兄をはじめとする浪江の人たちの応援に元気をもらっている。音楽を通して、復興の後押しができれば」と活動を続けています。

私は、高校まで浪江町で暮らしていました。高校卒業の頃から、歌手になりたいという思いが強くなり両親に伝えたとこ、「大学に進学し、資格を身に付けたら好きなことをしていいよ」と言われ、短大で栄養士の資格を取りました。東日本大震災の時は東京近辺で歌手としての修業中でした。自宅のテレビで、福島の様子が映し出されるのをどきどきしながら一人で見ていました。



▲「るいぶらいゆ」
手書きの絵本の
表紙です。



▲Tシャツも作りしました。

父母がいきました。家族の安否が心配で、震災直後から、家族に電話をかけた続けましたが、家族全員の無事が確認できたのは、震災から約1週間ほど過ぎた頃でした。父は学校の先生、長兄は役場の職員、次兄は東京電力の協力会社に勤めています。次兄は、震災の時に、福島第一原子力発電所の4号機で働いていました。普段は15分で帰れる距離を6時間かけて帰ったとのことです。

浪江での一番の思い出は『十日市』。一日目は友だちと、二日目は家族と、といった具合で三日間通いました。学校帰りに、友だちと行った文房具屋さん「ほていや」、「サンプラザ」や「スパーフジコシ」では、行くとき必ずと言っていいほど、知り合いに会えました。カフェ「はるく」は人生初めてのアルバイト先、キーキ作りの補助やホールのお手伝いをさせてもらったりしました。

歌を始めて6年目になります。今は、オリジナルの曲を聴いてもらえるようになりました。震災以降は、東京をメインに時折福島へ。東京ではロック系の曲が、福島ではバラード系の曲が

好まれます。震災直後には、東京の人たちに福島の人たちの思いを伝えるため「311」という曲を作りました。福島の人たちからは「本当に歌詞の通りだ」と言われ、作って良かったと思っていました。元々は震災を経験されていない方々に福島を忘れないで頂けたらという想いで作った曲でした。

最近できた曲「るいぶらいゆ」は、聴いた人たちが明るい気持ちになれると思って歌詞を考えました。今年の『十日市』で歌ったら子どもたちが、曲に合わせて楽しく踊ってくれて、うれしかったですね。一緒にキャラクターや絵本、Tシャツも作りました。

震災から2年9カ月、東京の人たちの意識から震災は遠くなってきたように思います。一方で、被災者の人たちの多くは、暮らしの不安を抱えています。そのギャップに戸惑いを覚えますが、時に、東京でも復興のために動いている人に出会うと、うれしくなります。これからも「頑張つて」ではなく、「一緒にがんばろう!」というメッセージを歌で伝えていきたいと思えます。



国分 勝さん(酒田)

取材者：浪江町役場 嶋原

取材日：12月3日 「平成26年1月 広報なみえ掲載」

いつもチャレンジャーでいたい

浪江で建築板金業を営んでいらした国分さんは、震災後、仮設住宅の建築などに携わり、現在は役場二本松事務所の生活支援課で臨時職員として勤務されています。以前とは全く違うお仕事ですが、“今までやってきてない事を新たなチャレンジだと考えて楽しんでいます。常にチャレンジャーでいたいですね。”と、毎日元気な声で親しみやすい電話対応を心がけていらっしゃいます。



▲仕事の様子（役場二本松事務所にて）

震災が起こった時は、作業場のある幾世橋の実家に仕事の材料を取りに行っていました。作業場は地震の影響で物が散乱しましたが誰も怪我はありませんでした。子どもたちも無事で、両親と一緒に電気と井戸水が使える酒田の自宅で2日間過ごしました。13日に弟のいる小高へ避難し、水素爆発の翌日に二本松市にあるJICAの研修施設に移動して3カ月程いました。その後、2次避難所を経て震災

の年の8月から二本松の借上げ住宅で暮らしています。

浪江では、色々な人と関わりを持ちながら建築板金業をしていました。その繋がりで浪江の建築組合から仮設住宅を建てるのに力を貸してほしいと依頼があり、数百棟の仮設住宅に係わりました。福島県の仮設住宅はあらかた回りましたが、初めの桑折仮設には朝5時に起きて二本松から1時間半かけて通っていました。その時は大変だという気持ちではなくて、とにかく建てなきゃいけない。仮設を建てるのが第一優先だ”という意気込みでやっていました。

その後、教育委員会から浪小・浪中を再開したいので1カ月で何とかして欲しいと言われて、12人の仲間と夏休みが終わるまでに使えるように準備をしました。廃校になつていた校舎だったので、子どもたちに気持ち良く学校生活を送ってもらえるようにみんなで力を合わせて頑張りました。その仕事も終わり、役場の臨時職員として一時立ち入りの受付業務に就いたのは10月です。畑違いの仕事ではあり

ますが、その分、何をやってもしっかりとチャレンジの気持ちで取り組んでいます。電話を受けていると、皆さんの様々な思いにふれる機会が多くあります。建築業をやっていたときに知り合った人と話す機会があったり、おじいちゃん、おばあちゃんの話の聞き役になることもありです。元々役場に勤めていたわけではないので、皆さんの立場も分かり、その視点に立つて仕事をしたいと思っています。

建築の仕事は、子どもの学校の転校を伴うので今始める事は難しいですが、何の仕事であっても子どもに親が働いている姿を見せていかなければいけないと考えています。子ども達は自分の張り合いで、いつでも子どもたちの一番の応援団で在りたいと思っています。悪いことを考えたら終わりなので、常にやってやろうという心構えです。そうしないと人生がつまらなくなります。皆さん、どんどん働いて元気にいきましょー！



石井 絹江さん(赤字木)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井
取材日：12月6日 「平成26年1月 広報なみえ掲載」

皆さんが浪江に戻りたくなる環境づくりの一助になりたい

～ふるさとの力こそが私たちの心を
支えてくれると信じて～

石井絹江さんは、震災後、阿武隈地域の伝統食を活かした「かーちゃんの力・プロジェクト」に参加し、仮設住宅に弁当を届けるなど、ふるさとの力を復興へと結びつける取り組みを続けてきている。石井さんのお話からは、必ず浪江に戻って復興させたいとの強い思いが伝わってくる。



かーちゃんの力・プロジェクトは、震災の年の10月頃から始まりました。復興に向けて自分たちにできることはないかと思いついた女性たちとともに、栄養に配慮した健康弁当の配食などを進めてきました。今は、父の体調が悪くなり、そのお世話をするためにプロジェクトを離れましたが、まだまだ自分のできることはあると思っています。私は、役場職員として退職ま

で地域の皆さんに育てていただきました。だから50歳の頃から、町の産業振興に携わりながら、今度は支えていただいた皆さんに恩返しをしたいという思いがずっと強くありました。大震災前は、町内にできた5つの直売所を中心に、地域にある豊富な食材を掘り起こしながら、全国に発信する取り組みが軌道に乗りつつありました。直売所では、行者にんにく、ブルーベリー、りんどう、キノコ、がぼちや饅頭、サケの燻製、そして菜種やツバキから搾った油など、地域の皆さんと様々な取り組みに挑戦してきました。大震災によって、すべては止まってしまいました。それまで培ってきた経験、そして何よりも地域の皆さんとのつながりは今も力強く生きています。現在も、金谷川など福島市の周辺に農地を確保し、野菜などを作付けして、その灯を絶やさな

いよう。野菜などを作付けして、その灯を絶やさな

うにと頑張っています。震災から2年半が過ぎて、それぞれの土地での生活が定着してきている方もいると思います。けれども、何か心の中にぽっかりと穴が開いている感じがします。やっぱり私は浪江に戻りたい。ふるさとが私たちの心を満たしてくれるはず。浪江に戻って、高齢の方々と一緒に畑を作りながら、浪江のおいしい食べ物を食べさせてあげたい。

将来、町への帰還が始まったから、なるべく支え合って暮らせるように、公営住宅を整備したり、その周辺には皆で野菜を作ったり、草取りができるように農園を確保するなど、戻った人びとが生きがいを持って暮らせるまちづくりを進めていただきたいです。実際の作付け、できた野菜などを使つての食事作りや配食は、私たちに頑張らせてほしい。そうして浪江町にみんなが戻りたくなるような環境づくりに取り組みたい。それが今の私の願いです。私は浪江町が好きです。ふるさとの力こそが、私たちを支えてくれると信じてこれからも頑張っていきます。



菅野 裕美さん(南津島)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：12月7日 「平成26年1月 広報なみえ掲載」

望みは、「落ち着いた暮らし」

現在、福島市の西部、吾妻連峰の麓に近い佐原仮設住宅にお住いの菅野さん。故郷の津島には月に1回帰れるようになったけれども、だんだん用事も少なくなってきたと話されていました。まもなく仮設住宅から復興住宅への移行時期が来ますが、お子さん方の進学もあり、福島市での次の暮らしを考えていらっしゃるとのこと。



▲佐原小学校跡地応急仮設住宅・集会所の前にて

■佐原は、故郷・津島に似ています

東日本大震災発生直後、家中は物が散乱しましたが、家そのものは大丈夫で、約1週間ほど家で生活していました。辺りの道は、津島の公民館や学校に避難する請戸周辺の海に近い人たちや町なかの人たちの車で大渋滞でした。

その後、浪江町が全町避難を呼びかけましたので、父や母、子どもたちを連れて岩代体育館に避難しました。そこに2週間ほどいた後、二次避難所となった福島市の土湯温泉に移動しました。4月～夏頃まで4、5カ月間避難生活をし、その後、仮設住宅が出来たことを役場から知らされて、子どもがいる家は

佐原か、しのぶ台かの選択でした。二次避難所も仮設住宅に入居する時も子どもたちが優先され、おかげで土湯温泉の時も佐原に移ってからも、荒井小学校と西信中学校に一貫して通うことが出来ました。

福島市の西部に位置する佐原は、市内に比べて雪もたくさん積もるし、風も強い。津島と同じような気候風土です。この良いところは静かなことです。反面、Aコープの移動販売があるものの、周りには店が少なく、車は必需品です。

この仮設には22世帯が住んでいます。震災以前に住んでいた地区はバラバラで、最初は大変でしたが、2年も過ぎると大分慣れてきたようです。

■佐原から転居する時期が近づいています

現在、自治会長を務めて2年目ですが、住民全員が気軽に挨拶を交わします。引きこもっている人は一人もいません。でも、後1年くらいで仮設住宅の耐久年数の期限が来ますので、復興住宅などに転居することになります。既に先月は2軒、今月は1軒と、転居する家が増えています。

先月、入退院を繰り返していた父が亡くなりましたが、母は

元気で

下の子どもが福島市内の高校進学を希望していることや、後3年は最低でも帰町できないことがあり、私たち家族は福島市に残ることになると思います。

ただ、復興住宅は集合住宅でしようから、階上、階下に対する不安もあります。小さくてもいいから一戸建ての暮らしがしたいですね。

■町には、これからの暮らしの目途をはっきりと示して欲しいです

放射線量によって区域編成が変わり、津島には時折帰れるようになりましたが、人が住んでいない土地は草木で荒れ放題、人影もありません。

今の技術では実現出来ないようですが、山の除染をしない限り、帰ることは無理なのではないかと私は思っています。故郷に戻りたいお年寄りがいても、帰る時期が10～20年後では、元通りに住むことに見切りをつける他ないような気がします。

町として早く対策を打ち出さないことには町民の帰町はないですし、ましてや原発の廃炉には相当の時間がかかります。先の見通しがないと私たちは動きようがないことを、もっと考えて頂きたいと思っています。



福島県

かとう美容室 加藤喜志子さん(川添)

取材者：浪江町役場 舩田・嶋原

取材日：12月4日 「平成26年1月 広報なみえ掲載」

美容室を憩いの場にしたい

『浪江のころ通信』第12号掲載の加藤喜志子さんは、新潟からご主人と同じ二本松市の仮設住宅に引っ越され、12月12日に本宮市の恵向仮設住宅内で“かとう美容室”をオープンされました。「沢山のお客様に来ていただければ嬉しいですが、だれでも入ってきて話だけでもしてくれる憩いの場になったらいいな。」と、おっしゃいます。

震災の年の4月に生まれた孫が新潟にいますので、2年間はそばにいてあげようと決めて、3人の孫たちの世話をしたり一緒に遊んだりしていました。浪江で美容室をやっている時は忙しかつたので、のんびり過



▲娘さんたちと一緒に
後列左 長女 久保田寛美さん、
後列右 三女 渡邊直美さん

◀12月12日、オープン当日の様子

ごすのが夢だったはずなのに、仕事を離れている間はマイナスの気持ちになってしまいました。そして、忙しくてもきちんとしていて得た収入で楽しいことをするのが幸せだと気付きました。浪江のお客様さんはいいい人ばかりで、あんなに幸せなことはなかったなと思います。町で友だちとすれ違って手を振るだけで幸せだったと思うと、新潟ではそれが出来ないのが寂しいことでした。

2年が過ぎてから、店を再開する情報を集めに役場へ行き、中小機構の仮設施設整備事業制度を知りました。そして、これなら出来るかと考えて、恵向仮設住宅自治会長の平本佳司さんをはじめ、仮設の皆さんのご理解をいただいて再開を決めました。仕事をしたいというだけでなく、3人の娘たちに自分の足跡を残しておかなければと思ったからです。初めはひとり店を始めるとつもりでしたが、娘も心配してくれたので美容師をしている下の娘に、「ケンカしながら一緒にやろうね。」と誘ったら、一緒にやってくれることになりました。わざわざ引越してく

れた娘夫婦に感謝ですね。上の娘も美容師なので、孫が大きくなったらいつか一緒にやりたいという夢もあります。

オープンした12月12日は、浪江のかとう美容室が昭和63年に開店した記念の日です。いちに、いちに、と一歩ずつ進むように同じ日を選びました。恵向仮設住宅の中にあるお店なので、店づくりをいろいろ考えて、お年寄りに優しい美容室づくりとして、シャンプーもセットも移動なしで出来るようにしました。若い方にも喜んでもらえるように、パーマは最新の髪に優しいエアウエーブです。また、待っている間も終わってからもお茶のみの場としてゆっくりしててもらえればと、着付け室にはこたつを置いて待合室にしました。朝から晩まで居てもらってもいいです。皆さんの顔を見て話すのが本当に楽しみです。女の人が仕事を持っているのは大変ですが、幸せな事だと思えるのでこれからも頑張っていきたいと思います。皆さん、どうぞ気軽に「かとう美容室」にお越しください。お会いするのを心待ちにしています。



熊川 勝さん(請戸)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：12月26日 「平成26年2月 広報なみえ掲載」

ここを出る時のことを 何も思い浮かべることができないのです

津波で奥様を目の前で亡くした熊川さんは、今でも仮設に祀る遺影に向かって語りかけ続けているそうです。これまでの出来事を「あの時こうだったら」「もっとこうしていたら」と振り返るたびに悲しかったり悔しかったりするけれど、まもなく3年目を迎える二本松市塩沢での暮らしにすっかり馴染み、自治会長として毎日みんなとどう楽しく過ごすのが元気の源、とおっしゃいます。



▲「妻とは見合いましたが、一目惚れでした」と
照れながら話してくださった熊川さん

■私だけが大了た怪我もなく、助かりました

あの日の午前中は中学校の卒業式に出席し、午後のゴルフから帰る道で地震に遭いました。道が浮き上がり、電柱が倒れてくる中、車を飛ばして帰宅すると、両膝の手術をして歩行が不自由だった妻が私を見て、安堵した表情を浮かべました。ふと見上げると今まで真っ青だった空が突然真っ暗になり、津波が家を直撃しました。妻を抱え階段の踊り場まで駆け上りましたが、直ぐに波に囲まれてしまい、死を覚悟しながらひつしと抱き合い、「これで終わりか、

これまでありがとう」と言ううちに、妻が波に引き込まれてしまいました。私はウインドブレーカーが浮輪替わりになったのか、どうにか屋根に登り、254号線の古い橋桁に網が引っかかっているのが見えたので流されている家から飛び移りました。

■理不尽な思いもしたけれど、さまざまなお会いに感謝しています

その日は役場へ避難し、裸のまま毛布1枚で一晩過ごしました。翌朝「バスに乗れ！」という声と共に大勢の人たちが津島へ向かってしまい、取り残された私は長兄を頼って南相馬市に移りました。ここでも避難指示が出され次兄と飯館に移動後、私は横浜に嫁いだ娘を頼ることにし、僅かな情報を頼りに福島空港へ向かいました。そこで青森から来た親戚な青年と出会い、おかげで那須塩原から新幹線で横浜まで辿り着きました。娘に妻を助けられなかったことを詫言ると「お父さんだけでも生きていてよかったです」と答えてくれました。

ました。遺品の写真と推定年齢とが合わずに遺体の確認が遅れ、遺骨となつての再会でした。滞在先の土湯温泉「天景園」(平成23年9月廃業)では部屋に祭壇を置いてくださったたり、二本松市内の鏡石寺さんには妻や請戸で亡くなった方々の供養をしていただいたり、地域の方々には本当に良くしてもらっています。

■忙しい日中は気が紛れていますが、夕方が辛いです

2011年8月にこの塩沢の仮設住宅への入居と同時に自治会長を務めています。最初は約90世帯あったのですが、現在は63世帯100人弱。小学生は1人だけで、もう少しいると賑やかでしょうけれど、今年のクリスマス会には普段出て来ない男性も参加しました。他にも二本松自治会連合会やゴルフクラブ等、いろいろな団体の会長をしており、結構忙しくしています。また、仮設での交流会では皆さんと会話を楽しんでいきます。

浪江に早くお墓を作り、妻を安らかに成仏させてやりたいと思っています。私自身はこれから復興住宅に入る気もしないし、先が見えない今、まだ何も考えられないのが正直な気持ちです。



曽根 行正さん・明美さん(権現堂)

取材者：コミュニティ・ワークス 青木

取材日：12月25日 「平成26年2月 広報なみえ掲載」

お世話になった皆さまにまた会える日を願って！

明美さんのご両親と息子さん、そして愛犬クッキーとフェリーに乗り、震災5日目には、叔母夫婦が暮らす北海道恵庭市へ。当時中学校を卒業したばかりの息子さんも、3月には高校を卒業します。「3年通いました。ここで…」と、時間の経過をあらためて実感しながらお話をくださいました。



▲愛犬クッキーも一緒にポーズ！

■浪江町から恵庭市へ
父の代で3代目となる「松乃家」を両親とともに営んでおりました。あの日は、お店が休みだったのでみんな家におり、子どもは中学校の卒業式でした。式典が終わり、昼食を済ませ買い物に行こうと、私が外に出たら珍しく犬が吠えたので戻ったところ揺れが始まり、ものすごく怖かったことを覚えています。夫は仕事で、同僚とトラックで走っていて、茨城の鹿島の辺りで地震に遭いました。無線で

やりとりし、日立の山の方から裏道を通り、迷いながらも茨城で6号線へ出ました。津波を被った後で道路には冷蔵庫などが転がっていたそうです。普通なら4〜5時間くらい道のりだけ、20時間以上かかって富岡まで来ました。会社の社長が迎えに来てくれて、原町から川俣に避難して、3日目に家族と合流しました。それから新潟周りで車にガソリンを入れ、フェリーで北海道に向かい、恵庭市にいる叔母のところへ一旦お世話になりました。避難生活が長引くことがわかったので、その後叔母の家に近い団地に移りました。はじめは両親と同じ団地にいましたが、今は近くのマンションで暮らしています。

■楽しみをひとつずつ広げて
子どもはこちらの高校に入学しました。はじめは誰も知りませんでしたが、入学後すぐに宿泊学習があり、それをきっかけにお友達が出てきて楽しそうに通学してくれるようになり、安心しました。今は進学したいと頑張っています。両親は、越してきた年は市役所の人たちが持つてきてくれる企画によく参加していました。知らない所に来たので、楽しみにしていたようです。最近は地元のNPOから、餅つきや日帰りバスツアーに誘われて行っています。また叔父が昔小牧に父を釣りに連れて行ってきて、その時は大漁だったようです。父は大好きな釣りができるとても喜んでいました。本当に叔母夫婦には大変感謝しています。

■気になることは
やっぱり住むところは早く決めたいです。「復興」ってなんだろうと考えることもあります。町に戻る前提もありますが、正直、戻れるのかという不安もあります。こちらに来てから浪江の方にお会いしたことがないので、北海道にいる浪江の方にお会いしたい、そんな思いもあります。震災の日までたくさんの皆さまにお世話になりました。また皆さまにお会いできる日が来ることを願っております。



福島県

伊集院律子さん(大堀)

取材者：浪江町役場 舛田・嶋原

取材日：12月5日 「平成26年2月 広報なみえ掲載」

音楽が結んでくれた人との繋がり

『浪江のころ通信』第1号に掲載の伊集院律子さんは、当初の取材時には新潟県上越市に避難されていましたが、震災の年の10月末から南相馬市でご両親と3人暮らしをなさっています。現在お住まいの借上げ住宅の一室でピアノを教えるだけでなく、合唱団の指導や自らも合唱団員として歌うなど音楽と関わることで生き生きと過ごしていらっしゃいます。



▲ご両親と一緒に
(左から) 父 近藤 洋さん、律子さん、母 近藤又ミ子さん

上越にいたときは、これからどこで生活したらいいのか漠然としていて、どこに住むか当てがない状態でした。そんな時、浪江の時から関わっていた南相馬市の合唱団「ゆめはつと」のメンバーの方が、福島に戻ってこないかと言って住まいを探して下さり引っ越すことができました。ひとりではど

う動いてよいかわからなかった。親身になってくださった方々には感謝の気持ちでいっぱい。改めて人のつながりの有難さと大切さを感じました。南相馬市は浪江に近いし、気候もほぼ同じなので住みやすいところ。ずっと気になっていたお墓も最近直すことができました。

ここに住んですぐに、浪江の子どもや近所の子どもがピアノや声楽を習いに来てくれました。受験を控えている生徒もいて合格した時は本当に嬉しかった。昨年4月には、避難先から原町に戻ってくる子どもが増えて、今は小学生、中学生、高校生に大人の方までレッスンを来てくれます。合唱団の指導としては、「ゆめはつと合唱団」だけでなく、福島で活動している「浪江混声合唱団」と、相馬市で練習している「ゴール・かしま」にも行っています。そのほかに趣味として、自分たちで楽しむ10人程のアンサンブル「エピファニー」で歌っています。

浪江町の友だちには、用事に合わせて東京まで会いに出掛けたり、メールをしています。住まいが離れてしまった孫たちの姿は、フォトフレームから送られてくる写真を見たり、保育園の行事がある時は岐阜県の下呂市に会いに行きます。それから気掛かりなのは、浪江町で教えていた生徒たちが、避難先で元気なのか、音楽は続けているのかなということ。音楽をやめるのはもったいないので続けていてほしいと思います。生徒たちが音楽を好きでいて欲しいですね。

色々なことが不安と言えませんが、何をどう考えていいかわからなかった震災当時とは違います。浪江にいた時より忙しい日々ですが、目一杯やれて充実しています。自分ができることをやるのは良いです。好きなことを仕事にしているの、仕事がある以上は続けていきたいと思っています。



笹木 浩二さん・厚子さん(権現堂)

取材者：NPO法人くびき野NPOサポートセンター 新保
取材日：2月7日 「平成26年3月 広報なみえ掲載」

避難者でなく、“普通の生活”を取り戻したい

現在、笹木さんご夫妻は、新潟県新潟市内で息子さん（次男）と2匹のワンちゃんと一緒に生活しています。現在高校2年生の息子さんが卒業したら、福島県中通りへ移り新生活を始める予定です。



▲一緒に避難してきた2匹のワンちゃんと

■ガソリンを求め、たまたま新潟へ避難
震災発生時、すぐに自宅へ帰れると思っていたので、ペットの道具だけを持って避難しました。なかなかペットと一緒に受け入れてくれる避難所がなく、川俣の道の駅で車中泊ということもありました。
ほとんどガソリンが減ってしまい不安は募るばかり。知人から「新潟方面に行くと、ガソリンがあるよ!」という情報だけ

を手掛かりに、新潟方面へ車を走らせました。新潟市に到着したころ、すぐに帰れないかもしれないという状況を把握。
まずは安心して寝ることができるところを見つけなくてはと思い、不動産屋さんへ。避難する時は何か追い立てられていて、親戚や知人に頼るということもパツと考えることができませんでした。初めて入った不動産屋さんで、物件だけでなく家具の手配などにも気をかけてくださり、本当によくしてくれたのを覚えています。

■息子の高校生活と家族の今後
浪江町では、2世帯で住んでいました。長男は震災前より関東の大学へ進学していましたが、震災を機にさらに世帯分離という形になってしまいました。現在、こちらでは定着した就職につくことも難しい状態にあり、今後の生活のことは次男の高校卒業後にしっかりと考えようと家族で決めました。
次男も、あのような形でいきなり日常をはぎ取られて、子どもながらも喪失感などもあると

思います。現在通っている新潟市内の高校で友だちもたくさんでき、充実した高校生活を送っているようです。しっかりと卒業までここで過ごさせてあげたいというのが今の願いです。
私自身も新潟市内での生活に少しずつ慣れてきて、同じく新潟市内に避難しているママ友と月1回ランチに出かけたりしています。今年は、例年に比べ雪も少ないようで一安心です。
雇用やインフラの整備など、浪江町で生活再建をするのはまだまだ多くの課題があります。就職や家庭など様々な事情で帰町できない町民も多いと思います。そのような町民へ、他の地域での定住支援への切り替えも必要になってくるだろうと感じています。
どこまでもいつまでも“避難者”という立場ではなく、以前のように普通に働き、普通に家族みんなで何気ない日常を過ごせる日が来れば良いと思います。



千葉県

三原 優蔵さん・裕子さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋

取材日：1月31日 「平成26年3月 広報なみえ掲載」

様々な人との出会いと支援に感謝しています

3年近く暮らした山形県米沢市から昨年12月に転居し、千葉県柏市で暮らす三原さんご夫妻。今の状況を前向きにとらえ、生活を楽しむ工夫をされています。



▲三原優蔵さん、裕子さんご夫妻

私は、もともと松戸生まれですが、結婚を機に妻の実家のある浪江町に入り、自転車兼玩具店を継ぎました。店舗は新町商店街にあり、店内には玩具の他に、ゲーム機を30台近く置いていましたので、学校帰りの子どもたちの遊び場になっていました。子どもたちは、私のことを「ゆうぞうさん」と名前前で呼び慕ってくれ、成人したかつての子どもたちから結婚式の案内が届くこともありました。妻の裕子は、何事にもひたむきに取り組む性格で、趣味で始めたパッチワークやエステをもとに、パッチワーク教室やエステサロンを

暮らしていました。震災後、避難所を経て、昨年12月まで山形県米沢市の借り上げ住宅で暮らしていました。



▲お・す・そ・わ・けの柚子

開業していました。震災がなかったら、死ぬまで仕事を続けられたのにと口惜しくなります。今は、2カ月に1回ほど、浪江町に帰りますが、ネズミの糞や死骸で家中が臭くて、掃除をする手も止まってしまいます。店側の片づけは全くとおらず、ショーウィンドウが壊れたままになっています。

震災当初は、「どうなるんだろう」という不安ばかりでしたが、「浪江のころ通信」の取材が縁で交流が始まったNPO法人きらりよししまネットワークの人たちが、生活面のこと、仕事のことなど様々サポートしてくれ、ほんとうに有り難かったです。末の息子が大学生で、教育費が必要だったこともあり、私はホームセンターで、妻はスーパーマーケットで働きました。二人とも今まで、人の下で働くといったことがなかったのですが、最初はたいへんでしたが、そのうち、子どもたちと同年代の上司の相談相手のようになり、楽しく働くことができました。浪江では家業が忙しく、食事づくりは三原のお母さんが担っていただいていたので、妻はほとんど台所に立つことがありませんでした。そんな妻が、スーパーマー

ケットで惣菜づくりをし、店舗内で行われたコンテストで賞をもらったのです。震災がもたらした浪江では会えなかった様々な人との出会いと体験がありました。現在住んでいる家は、姉の持家を譲ってもらいました。借家にしていましたが空いたので、昨年の12月14日に越して来ました。雪のある暮らしは辛いと、いわき市の借り上げ住宅で暮らす三原のお母さんも、車で迎えに行き、柏で一一緒に過ごすことが多くなっています。柏に来て1カ月半、ご近所付き合いのきつかけになればと、庭の木になった「ゆず」を籠に入れ、「自然の恵みをどう蔵〜！お・す・そ・わ・け」の案内をつけて、玄関先に置きました。うれしいことに、お礼の言葉といっしょに頂き物をしたり、仕事先の紹介をしてもらったりしています。

震災に遭い、友人のありがたさを実感しました。電話をくれた人、みかんやお米を送ってくれた人、人の温かさに触れることができました。悪いほうにばかり考えると、どんどん気持ち重たくなります。周囲の人からの支援を当たり前と受け止めず、感謝の気持ちを忘れずに暮らしていけたらと思っています。



福島県

前田 哲子さん(権現堂)

取材者：浪江町役場 小島・中川・嶋原
取材日：2月28日 「平成26年4月 広報なみえ掲載」

人のお付き合いを大事にして 物づくりを楽しむ日々

浪江町で30年間麻雀荘を経営されていた前田さんは、現在、本宮市の仮設住宅で暮らしています。朝1時間の散歩を日課とし、クラフトのかが作りや手織りのショール作りなど新しいことに取り組み、毎日を生き生きと過ごされています。気さくで明るい人柄に自然と友人も増えていらっしゃるようです。



▲ショールを作っている前田さん

ら浪江の人と話ができていいと思っただからです。

ここでは、地元の方にもとても親切にしていただいています。

住まいに慣れて落ち着き心の余裕ができた頃に、出来ることをやろうと思ひ、本宮市のシルバー人材センターの特例会員になって新しい友人ができました。

また、集会所でクラフトのかが作りを教えていただき、工夫しながら楽しんで作ってイベントがあれば販売しています。少しでも売れると喜びを感じてやる気が起きます。

そのほかに楽しんでいるのは、昨年学んだ「手織り」です。春のショールなど自分の物も何枚か作り身に付けていますし、孫たちにも作りました。

震災・原発事故がなければ、今もお店を続けていただろうなと思います。

浪江町は生まれてからずっといた町です。ありふれた生活でしたが、今はそれがいかに大事だったかと思ひます。「いずれ浪江に帰ろうね。」と、言っています。果たしてどれくらいの方が帰るのだろうかと思ひます。浪江に戻りたいと思ひ、息子家族や友人が暮らすいわきや、今住んでいる本宮にも馴染んできているので迷いません。

朝早くからの1時間の散歩に始まり、ラジオを聞いて楽しんで、用事で出掛けたり、物づくりをしたりとうまく時間を使っているの暮らしています。避難生活の中で、以前のお客様との繋がりの有難さを感じたり、新しくできた人の繋がりと新しく始めたことなど楽しい出会いがあつて、外に出て行くことは大事ななあと思ひます。

先々の不安はありますが、これからもかごの販売やショールも数を作つて将来的に販売するという夢を持って、健康に気を付け前向きにやっていきたいと思ひます。

震災当日の夜は浪江中学校、翌日から4日間を津島で過ごしてから、二本松市の杉田住民センターで1か月の避難生活を送りました。それから2次避難所の猪苗代町沼尻温泉で5か月過ごして、平成23年9月より本宮市の恵向仮設住宅で暮らしています。

恵向仮設住宅を選んだのは、

交通の便から浪江に行きやすいこと、借上げに比べて仮設な



佐藤亜由子さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：3月6日 「平成26年4月 広報なみえ掲載」

アンジーとジャックを真ん中に、 大好きな家族がしっかりつながって

震災・原発事故による佐藤さんご家族の避難の日々と、愛犬たちを浪江町で救出し、大切に保護したNPO法人アニマルレフュージ関西（以下、ARK）の活動を通して、愛犬と家族の感動的な再会が綴られた物語『おかえり！アンジー』が3月5日、本になりました（集英社みらい文庫 高橋うらら・著）。

あの未曾有の大災害の際にペットを置いたまま避難せざるを得なかった家族の様子や、ペットに対するきちんとしたレスキュー活動を知って頂きたいと、亜由子さんは今回の取材を希望されました。

福島市飯坂町のご自宅を訪ねると、がっしりした体格の大きなアンジーが出迎えてくれました。震災後に飼われた猫のジャックも、私を不思議そうに見ながら「遊ぼうよ」と言わんばかりに、時折可愛いちょっかいを出してくれました。



▲また一緒に暮らせてよかったね。犬のアンジーと、猫のジャックを抱いた亜由子さん



▲「本を通じて、大災害が起こった時に家族の一員であるペットをどう守るのかを考えたり、ペットや飼い主家族を支援してくださるARKのような活動も知るきっかけにもして欲しいですね。」

■「心が決まるまで、犬たちはお預かりしますよ」

ARKの言葉に、勇気を貰って3・11当日は自宅にいました。断水以外、被害はさほど酷くはありませんでした。翌12日に有線放送で避難指示が出された時も「大したことはないだろう。念のための避難だろうから、すぐ帰れるよ」と、犬のアンジー、クラリス、シンバは自宅に置いたまま、ケージに入れた猫のジタンと財布、携帯電話だけを持って、車で国道144号を通り津島へ向かい、体育館に3日間、寝泊まりしました。

15日に起きた4号機の事故から再び避難するために、二本松市に向けて山を下ると、携帯電話がなくなり、安否を問うメールがたくさん入っていて、福島市飯坂町に住むいとこと連絡を取り合い、頼ることにしました。4月末に同じ飯坂町内のアパートに移り、長女は地元の中学校に、長男は5月の連休明けから安達のサテライト高に通うことになりました。夫は浪江に戻るたびに犬たちの安否を確かめ、出来るだけの世話をしていました。6月12日に夫が帰宅し、ARKが残してくれた貼り紙から、犬たちは無事に保護され、遥か大阪府能勢町で暮らしていることが分かりました。私もARKと連絡を取って犬たちの安否を確認し、そのご支援の確かさを

心の支えに、犬たちの今後について何度も家族で話し合いました。オーストラリアン・シェパードのアンジーは珍しい犬種の上に、飼い方が難しい犬でしたので引き取る決心をし、比較的飼い易い他の2頭、クラリスとシンバには関西の里親を探して頂きました。そうなる大型犬と一緒に住める家が必要です。ようやく2013年7月に家が完成し、7月27日に福島空港に迎えに行きました。大震災の日から約2年半が経っていましたが、アンジーは私たちをちゃんと覚えていて、この家に帰ってきてからは私たちの傍を離れようとしませんでした。

■もう離れ離れになることは決してありません

アンジーは原発事故の影響で被曝しているかもしれない、大型犬の寿命は14、5年と言われていきます。でも仲良し家族の一員として共に過ごし、看取ってやりたいと思っています。私たち夫婦が頑張ったこの家を建てるのが出来たのも、アンジーがいたからこそでした。私たちは「本当に大丈夫」と言われるまで浪江町には戻らないと思いますが、私にとつては家族4人とアンジー、ジャックがいるところが、ふるさとです。仕事があつて、出来ることもあつた。私たちは、今とても幸せですよ。



静岡県

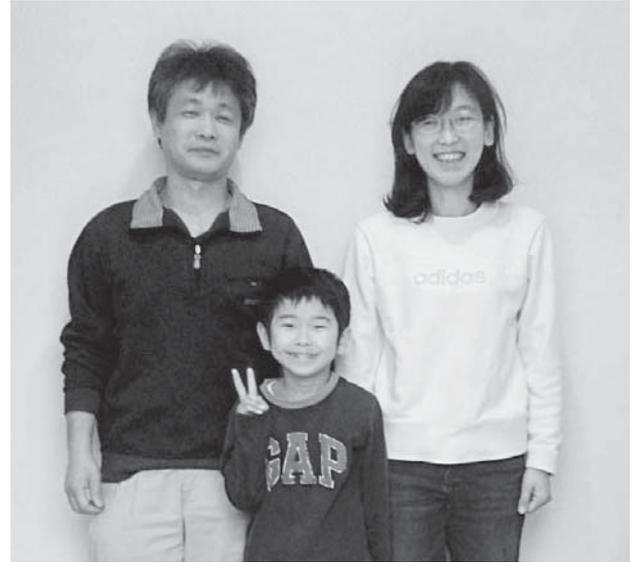
佐々木正信さん・優子さん・大輝くん(請戸)

取材者：コミュニティ・ワークス 青木

取材日：3月1日 「平成26年4月 広報なみえ掲載」

みんなで静岡に越してきました！

東日本大震災後、間もなくつくばに避難してきた佐々木さんご家族。慣れ親しんだつくばから今年1月に静岡県に引っ越してきたばかりです。お母さんのキヨ子さんと一緒に新天地での生活が始まりました。フォトビジョンから送られるまちの様子に思いを寄せ、これからの復旧・復興のみちのりを気にかけておられます。



▲4月から4年生になる大輝くんを囲んでニッコリ！

■震災の時、家族はバラバラでした
当時私と息子と母は請戸に住み、妻はつくばにいました。あの日の朝も、私は会社のある榎葉工業団地への通勤途中に、幼稚園に通う息子を夜の森にいる妻の両親に預けました。仕事が終わってから息子を迎えに行きましたが、もう誰もいなくて、どこに避難したのかわかりません。とりあえず息子にはおじいさんとおばあさんがついていてから大丈夫という安心感だけはありません。

■つくばではいろんな方にとてもよくしてもらいました
つくばでは市役所の方々に随

回しながら榎葉の道の駅に上がった時に津波が見えたので、請戸の家はもう津波で流されたと確信しました。津波が引いた後、夜道を走り6号線の先から瓦礫の山のため先に進めないことを知り、避難所の浪江町に向かいました。着いて早々玄関先で知り合いに会い、母の無事を聞いたのです。
気がかりは息子でした。翌朝早く夜の森へ迎えに出ましたが、仕事帰りには通れた踏切が通行止めになり、携帯は相変わらずつながらず、さらに津島への避難指示のため迎えには行けなくなり、その頃息子は、妻の弟夫婦のいる宇都宮に避難していたのですが、その消息もつかめないまま。つくばにいた妻がやっと宇都宮と携帯がつながり、私も妻と連絡がとれて、息子と会えたのは1週間経ってからです。小学校へ入学するために揃えていたもの全部が津波で流されましたので、品薄の中からやっとのことでお気に入りブルーのランドセルが見つかり、息子はつくばの小学校に入学しました。

■一緒に暮らすために
榎葉にあった会社は埼玉の岩槻で再稼働したので、つくばから通勤させてもらっていました。ところが今年に入り妻の転勤が静岡に決まり、もうみんなバラバラにはなりたくなかったので、突然でしたけど私は会社を辞め、母も一緒にこちらに来て暮らしています。つくばには約3年いて、だいぶ慣れてきたので長く住めるとよかったです。
こちらに来て息子は学校にも慣れてきて友達もできたようです。静岡はやはりサッカーが盛んで、友達と遊んでいます。1月にもかわらわらず子どもたちは半袖半ズボンで動きまわっていて驚きましたね。



神奈川県

竹田 一興さん・清子さん(権現堂)

取材者：コミュニティ・ワークス 青木

取材日：3月6日 「平成26年4月 広報なみえ掲載」

ふるさと浪江を思いつつ

横浜に避難で帰ってきたのは30年ぶりとのこと。前にいた時からの顔なじみで同年代のご近所の方々がいて、日々の暮らしを楽しく元気に過ごされている竹田さんご夫妻。近くに住むお子さんとも連絡をとりあい、お孫さんの健やかな成長を楽しみにしておられます。



▲清子さんが作られた木目込み人形と一緒に

■浪江と横浜の自然に癒されて

家内と一緒に横浜へ来たのは、震災後6、7日目。この家は母が住んでいて、私もここにいて結婚して10年間暮らしていました。子どもたちは幼稚園と小学校低学年まで、その後私の転勤で浪江に移って高校までいて、こちらの大学を卒業し、就職したり嫁にいたり。浪江の家は、子どもたちにとって田舎に帰るようで楽しみにしていたようです。「浪江に行きたい！」って今も言います。

昨年の一時期帰宅の時、庭の芝生は枯れていましたが、ドウダ

ンツジの紅葉の赤とリンドウのなんとも言えない青色が、一面に敷き詰められとても綺麗でした。すごく癒され、救われましたね。でもこれから除染で芝生や庭の土も全部掘り返されてしまうと思うと、残念です。

普段は週に4、5日朝走って、それからひと汗流してごはんを食べるのが日課。年間10本位、好きな市民マラソンに出ています。浪江にいる頃も地元のコスモスマラソンに出て、何回も走りました。10年以上前かな、10キロの部の50歳以上で3位になりました。今までに走ったコースで印象的なのは、三春の滝桜とダムのコースかな。樹木が立派なので何か力をもらえる。あそこはもう一回出てみたい。

避難して3年経ちますけど、浪江にいた頃と同じ職場の人が私よりも若くして亡くなったことを聞くと、昔一緒に働いた仲間を思い出しては、みんな頑張っているのか、元気でいるのかと、たまに気になります。この通信なんか見ると載ってないかな？と思って見たりして。だからこそ私も元気でいなきゃならないかなど。走れることは健康のパロメーターみたいなですね。

■顔なじみのみなさんに会うと元気になります。清子さん

ここに避難して1年半位は、体調がすごく悪くて一人で歩けなかったの。もともと大病をして外出に不安がありました。まだ本調子とはいかないけれども、昨年位から大分良くなり買い物にも一人で行けるようになりました。

浪江で懇意にしていた人形教室のお仲間が、東京や埼玉に4、5人いらつしやることわかりまして、今では2カ月に一度位、東京で会うのが楽しみなんです。やっぱりみなさんに会うと元気になりますね。

その人形教室の先生が山形の鶴岡に避難されたのでみんなで会いに行きました。鶴岡はいいところですね、私の第二のふるさとになりそうです。浪江もふるさとだったんですけれど、羽黒山や庄内平野の景観とか、遠くに墨絵の山が四方に広がり、なんて素敵なおとこなんだろうと。横浜にうずくまっているのでも余計に素敵に感じました。自分のふるさとではないのに、帰ってきた”という感じがして、もともとそこが実家だったような気分になりました。



福島県

只野とよ子さん(北幾世橋)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：4月3日 「平成26年5月 広報なみえ掲載」

元気で働ける、学校に通えるということが、今は一番です



▲「100枚もの手づくりの心温まるご支援でしたので、頂いたお手紙とセットにして、全世帯に配りました」と、昨年度、自治会長を務められた只野さん（今年3月31日に退任）。北海道、帯広市のご家族から郭内公園仮設住宅に贈られた「はり絵」の葉書を持って、微笑んでくださいました。

「あの日、津波を見ても信じられなかったし、信じたくなかった」と只野さんは話し始めました。

「家族を失った人たちのことを思うと、今回の災害や事故に対して悲観的になったり、周りを非難したりするのではなく、自分たちの出来ることを精一杯しながら、前向きに進んでいきたい」とおっしゃる只野さんには、“母は強し”という言葉が良くお似合いです。

■次男の命が助かったのだから、やり直せないことなんかないはず

あの3月11日は中学生だった次男の卒業式で、私は仕事から戻り自宅にいました。家には義母と高校生の長男が一緒でしたが、次男は海から1分くらいの友人宅に遊びに行っていました。大きな揺れや次々に落ちてくる瓦に危険を感じ、3人で避難しようと思いました。でも、よほど動転していたのか車の鍵が見つからず、その上、次男が気がかりでしたが、約1・5km離れた小高い丘に建つ小学校を目指して歩き出したところに、近所の方の軽トラックが通りかかり、便乗させて頂きました。小学校に着いても次男の姿は見当たらず、一旦丘を下ってみると、目の前まで海の泥や瓦礫が押し寄せてきていました。もう9割方だめだと思いましたね、津波に遭ってしまったのではないかな。でもお友だちのお母さんはしっかりした方だから一緒に避難しているかもしれない、などと思いつつ、地面にひれ伏して泣きました。長男が避難所まで探しに行ってくれましたが、その間、何度丘を下ったり登ったりしたでしょうか。別の避難所にいた次男を長男

が連れて戻り、4人で無事を確かめました。あの時ほど私が母親を実感したことはなかったですね。その3時間後に夫も無事に戻り、家族全員が揃いました。その1週間後に自宅を見に行きましたが、津波に遭った1階は見事に柱だけでしたが、家族みんなが無事なら、家ぐらいいいやと思えましたね。

■ふるさと浪江の近くに移って、いずれは帰りたい

翌日に起きた原発事故からの避難は南相馬市から福島市へと紆余曲折を経て、二本松市郭内公園仮設住宅に入居しました。震災当時、既に東京に住んでいた長女や2人の息子はこの春から就職と大学進学で家を離れ、義母と夫との3人暮らしになりました。夫が亡くなった親戚やいとこ夫婦の分も、強く生きていきたいと思っています。義母も元気で、身体のためにと霞ヶ城やこの周りの散歩を欠かしません。避難生活も4年目を迎えて、出来ることならば2、3年後には双葉郡広野町辺りに移りたいです。義母と一緒に小さな畑をしながら、子どもたちが時々帰って来る、そんな穏やかな生活が出来ればと願っています。



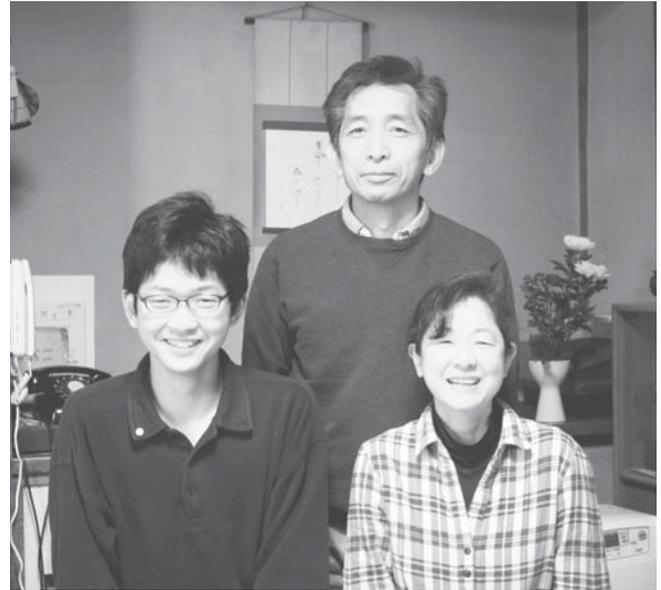
増田 和直さん・維織さん(権現堂)

取材者：NPO法人くびき野NPOサポートセンター 清水
取材日：4月13日 「平成26年5月 広報なみえ掲載」

未来を見つめて、歩んでいきたい

現在、増田さんは一家で新潟市内に生活しています。家族は徐々に新しい暮らしにも慣れはじめた様子です。

今回は新潟での生活について和直さんと維織さん(息子さん)にお話を伺いました。



▲にこやかに微笑む増田さんご一家

■戸惑った気候や環境の違い
あの3月11日、私は仕事で柏崎に、妻と息子は浪江町にいて、娘は東京で大学受験をしていました。家族がバラバラに行動していたので、それぞれ「無事」の声を聞くまでかなり不安な気持ちになったことを覚えています。その後再会し車中泊や福島避難所を経て、ガソリンや物資の心配もあり、両親の実家のある新潟市で暮らすことになりました。移り住んで家族は気候の違い

■慣れてきた新潟生活
現在は家族も新潟での生活に徐々に慣れてきているようです。都会の良いところとして美術館や博物館、水族館も近くにあって気軽に足を運べたり、外食する際のお店も豊富で、家族で過ごす時間は浪江町にいた頃よりも増えた気がします。息子とピククスワンでサッカー観戦もしましたよ。ただ交通の便があまり良くないかな。地下鉄があると便利になると思うんですが、いずれにせよ生活の多くの場面で新潟人の優しい気質に助けられ、感謝しています。

■もう一度、帰りたい思い。未来を見つめて
望みを言えば「もう一度あの町に帰りたい」が本音です。もちろん今すぐという訳にはいかないことは解っています。起きてしまったことは仕方ないので、むしろこれをチャンスに考えて

に戸惑ったようです。新潟の夏は蒸し暑く、冬はたくさん雪が降る。また浪江町と比べて新潟市は大都会なので、タケノコやみょうがなどを山で手軽に採る：という訳にはいかず、購入しなければいけないことに驚いていましたね。

■人の助けになれる人間になりたいー維織さん
この春、中学校を卒業して高校に進学しました。中学時代はバスケットボール部に所属し、多くの仲間と一緒に楽しい思い出を作りました。顧問の先生やチームメイトのご家族、支えてくれた全ての方に感謝しています。
震災後、本当に多くの方に助けていただいた実感がありません。現在は、「今度は自分が人の役に立ちたい」「人の助けになれるような人間になりたい」という思いが強いです。そのためにも高校でしっかり勉強して、自分の思い描く夢を実現できればと考えています。



福島県

中西總一郎さん(田尻)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：4月7日 「平成26年5月 広報なみえ掲載」

災害や苦労をチャンスに変えて

中西さんは、山形県南陽市に避難されていた平成23年7月から二本松市に営業所を開き、測量設計の仕事を手早く再開されました。

一緒に山形に避難していた奥さまや娘さんと生後間もないお孫さんは、一時、中西さんの友人のつてによって長野県東御市に避難されていましたが、平成25年3月に、娘さんたちは嫁ぎ先のいわき市に戻られたそうです。

今、中西さんは相双地区と二本松市等を営業範囲として、事業を行っていらっしゃいます。



▲「有限会社 中西測量設計」
二本松営業所にて

■社員や同業者仲間への応援を受けての事業再開でした
避難していた山形から、遠くは山梨や埼玉、宮城や県内のあちこちに避難した社員たちに連絡を取ると、みんな「仕事をしたい」と。一方、相双地区の同業者からは仕事を手伝って欲しいと声がかかったものだから、ならば二本松に営業所をと、訪ねた地元不動産屋さんで、その場に居合わせた大家さんを紹介され、とんとん拍子に拠点が決まりました。あの頃は物件が少なく、全国に避難していた8人の社員を呼び戻すために、社員

寮を確保するのに精いっぱいだったね。借上げは見つからなかったですよ。
その後、親御さんの世話や家族の転居などの理由で5人が退職し、現在は浪江町当時から社員3人に加えて、地元、二本松市で採用した社員が5名で、全社員は8名になりました。
震災以前は双葉郡全域で仕事をしておりましたが、今の現場は相双地区の津波に遭った海沿いが多いです。堤防や道路、田んぼの整備など災害復旧のための仕事の他に、地元である二本松市の仕事も受注しています。

■日々の生活と仕事に追われるようにして、余計なことは考えないようにしています
浪江に帰りたいとは思いますが、住める環境が整わないことには、いつ、どこに、ということとは決めかねます。田尻の自宅は大した被害がなかったし、権現堂にある会社も行くたびに掃除はしています。だけど、果たして戻れるのか。戻ったとしても、手を加えないと生活は始められません。思いはあるけれども、それはいつですか？と私が聞きたいくらいです。そんなことを思うと辛くなりますから、普段は無意識のうちに考えないようにしているでしょうね。
また、この二本松の方々にも良くして頂いていますから、もう避難者とは言えないのです。恩義を感じている分だけ、周りに気を遣ってしまいます。
たぶん、避難している浪江の人たちも感じていると思いますが、これからのことを聞かれても、「今は話したくない」と答える方も多いのではないのでしょうか。ですから、今やるべきことを精一杯やりながら、事業を継続することだけを考えています。



三浦 幸子さん(加倉)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：5月8日 「平成26年6月 広報なみえ掲載」

いろんなことがあっても、仕事が救いでした

もともと洋裁師の資格を持っていた三浦さんですが、震災前はパワーストーンの鑑定などをされていました。震災直後から県内外での3か月間の避難を経て、2011年6月に福島市の仮設住宅に入居され、9月25日にはリメイクをベースにした洋裁店を開業。現在は、福島市栄町AXC（アックス）ビル2階のショップ「ふく福」で頑張っています。

ご主人と娘さんが鹿沼市に、息子さんが須賀川市、幸子さんとお母様は福島市と、今は離れ離れの生活ですが、家族はもちろん、親族や友人、隣近所の方々が集えるような、自然に囲まれた楽しい家を再建したいとおっしゃいます。



▲福島駅東口から徒歩約5分。まちなかにお出かけの際はぜひ、お立ち寄りください。素敵な洋服や手仕事の品はもちろん、三浦さんとおしゃべりも楽しめますよ。

■家族や親戚、大勢であちこち避難しました
義母と一緒に帰宅した途端、地震に遭いました。息子もおりましたが、主人は仕事、娘はクラブ活動で小高商業高校に出かけていました。異様な揺れに動けなくなりました。義母を守りつつ、車を家から離し、空き地に停めて余震に備えました。地域の指定避難場所である加倉運動場には誰も避難せず、不気味でした。そのうちに親戚たちが車で駆けつけ、6号線近くまで津波が来ていたことを聞きましたので、ホットカイロや毛布、上着などを車に詰め込み、大堀のグラウンドで夜を明かしました。電話も繋がらず、どうしていいかわからない状態でしたが、主人や娘と翌

生活をしたり、猪苗代町の「マウンツ磐梯」にお世話になったりしました。当時高校生だった子どもたちの学校の情報は避難所以外では入手が難しかったため東和町の公民館に移り、その時に福島市の仮設住宅の募集を知り、母と義母を連れて入居しました。残念ながらその翌年の秋、義母は避難や狭い仮設住宅でのストレスや疲労のせいでしょうか、急に体調を崩して亡くなりました。■お客さまに助けられ、支えられて今があります
最初に開いたチェンバおうちの店には、大原病院に近かったことも幸いしたのでしょうか、浪江の方々や福島市のお客さまが大勢来てくださいました。福島市の方はものを大事にする方

朝6時頃にやっと連絡が取れ、本当に安心しました。家族と親戚とで津島や郡山の親戚、市川市の弟などを頼りました。弟の仕事関係の方には手厚いご支援を頂きながら相模湖の家で避難

が多く、和服や洋服に対してはもちろん、暮らしに対しても遊び心を持ったさまざまな世代の方がお見えになります。浪江の方は、遠くは京都や首都圏、秋田などからも訪ねてくださいます。開店から約1年後にAXCに移り、リメイクした洋服の他に、飯野町やいわき市、相馬市などいろいろな地域の方々30人程のご協力で裂織や手工芸品、バックなどさまざまな商品も増えました。店先の掲示板や電話で声をかけながら、そういった作者の方々の講習会などもやっています。

仕事を終えて自宅に戻ると、隣家に住む母と晩酌を楽しんだり、休日には一緒に山形に山菜採りに行ったりしています。仮設住宅に住むと料理をしなくなりがちですが、時折帰る夫や子どもたちにとくさん作って、持たせたりしているんですよ。いろんなことがあったけれど、今の私にとって仕事が活力の源であり、休みには自然と触れ合うことが慰めになっています。

「ふく福」
10〜18時・日曜休み
TEL 080 5577 6088
※所用のため臨時休業する場合がありますので、事前にお問い合わせください。



猪狩 彌市さん・君子さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：5月7日 「平成26年6月 広報なみえ掲載」

どこにいても、人とのつながりを大切に

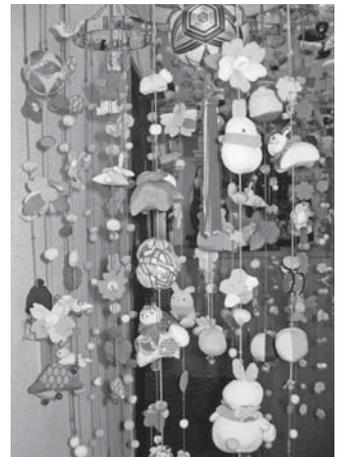
柏市にあるNTT社宅には、今も60世帯余りの人たちが福島県等から避難して暮らしています。猪狩さんご夫婦は、社宅周辺の人たちとも自然な形でつながりを作り、自治会等の行事に積極的に参加しています。



▲猪狩さんご夫婦

くなく、適当に人通りのある良い場所にあります。創業85年、祖父の代からの店ですが、店舗自体は28年前に建て替えたものです。店には、手芸用品だけでなく輸入雑貨なども置き、趣味の店として親しんでもらっていたのではありません。震災による建物の被害は少なく、商品は雨風にさらされることなく、余り傷んでいません。さりとて、販売もできず、今の住まいに持ち込むには限りがあるので、ほとんどそのままの状態にしています。

震災前、私は妻と娘と3人で手芸用品店を営んでいました。店舗兼住宅は、駅前商店街から一本中に入った郵便局の向かい、車の通りは激しい場所です。



▲君子さん手作りの「つるし雛」で明るい玄関

震災時、地震の揺れがおさまると、隣の床屋の店員の吉田さんが、「ガスが漏れてる。どうしたらいい？」と飛び込んできました。あわてて覗くと、石油タンクが倒れているうえに、ガスが漏れて音を立てていました。近所にも聞こえるように、「ガスボンベ閉めるー」と叫びました。近所の畳屋さんがつぶれ、向かいの大黒屋さんが強い西風に乗り崩れて行くのを見た時はショックでしたが、街中から火災が起きず、本当に良かったと思います。

役場や警察署に行きましたが、職員も気の毒なくらい混乱していて、原子力発電所の事故など誰も頭になかったと思います。早朝の防災無線の避難指示を聞き、妻と娘2人と一緒に車で津島高校に行きましたが、津島高校は人であふれ、寒さもあり一時だけ居て、福島市へ向かいました。途中、川俣南小学校に行き着き、娘と私は、後から避難してくる人たちのために、大きな案内看板を手に道路に立ち、いわきナンバーの車を見つけては誘導しました。

その後、私たちは親戚を頼って、柏市に避難して来ました。今、暮らしている借り上げ住宅は、取り壊し予定だったNTTの社宅です。狭くて、古い住宅で、以前の暮らしとは比べようもありませんが、周囲の人たちの暖かさに支えられています。お正月の餅つき大会、お花見やクリスマスパーティーなど自治会や疎開支援の会、ライオンズクラブ主催等の行事がたくさんあります。また、支援してくださる獣医さん提供の交流スペースがあり、いつでも開放されています。

私は商工会の役員をしていて、今も二本松で開かれる役員会に参加しています。店の再開は難しいと思っています。85年続けてきた商売への思いはありますが、一方で娘たちが安心して住める場所を作っておきたいという親としての思いもあります。1年更新の借り上げ住宅の暮らしはとても不安定です。今の状況を受け入れ、今後の暮らしを家族と一緒に考えていきたいと思っています。



新潟県

柴 恵美さん(請戸)

取材者：NPO法人くびき野NPOサポートセンター 新保

取材日：5月10日 「平成26年6月 広報なみえ掲載」

家族の笑顔を守りたい



▲柴さんご夫妻と新たに家族に加わった“チョコ”くんと一緒に

平成23年7月の『浪江のころ通信』第1号に掲載された柴さん。現在、震災当時の避難先である新潟県柏崎市で暮らしています。息子さんの進学や新たに増えた家族（ペット）のこと、現在の心境などお話しいただきました。

■現在の家族のカタチ

昨年秋、新潟県柏崎市市内で一軒家を借り、新たな生活が始まりました。

以前同じ市内で住んでいたアパートは、子どもたちの独立した部屋もない状態でした。受験生の息子、ピアノを習っている娘、子どもたちの環境を少しでもより良い環境に変えてあげたかったのが一番の思いです。

当時中学1年生だった息子は、

今年の春より新潟市にある野球の強豪校へ進学し、寮生活を送っています。また、娘も兄と同じ中学校へ通いソフトテニス部に入部、充実した学校生活を送っているようです。

震災当時一緒に避難してきたおじいちゃんとおばあちゃんは、現在福島県内で暮らしています。やはり、知人の多い慣れ親しんだ地域で生活したいという気持ちが強いです。

息子が寮生活のため、現在3人家族ですが、新たな家族としてトイプードルの“チョコ”が仲間入り。とっても元気がよく人懐っこい性格です。息子も可愛がっていたので、よくチョコの写真を送っています。

■NPOの活動をはじめました

浪江町に住んでいたときは、近所のスーパーに行っても知っている人たちがばかりでしたが、柏崎市内で生活を始めた当初は知っている人もほとんどいません。避難当時は不安もたくさんありましたが、今では子どもたちの部活動などを通じてママ友

や知り合いも増えてきました。また、今年の10月より、柏崎市内の避難者サロン『あまやどり』の活動に携わっています。サロンの活動を通じて、同じく柏崎市内で生活する浪江町のみなさんとも交流を持たせていただいています。

当時の『浪江のころ通信』にも書いているように、「すぐに浪江に帰れると思っていた」「ここに落ち着きたくない、浪江に帰りたい」という気持ちもありましたが、今は夫の仕事、子どもたちの学校生活のことなどを考えると、現状維持かな、と考えています。

生活を変えたいということは、本当に大変なことです。住むところや仕事を変えたり、子どもたちを転校させたりすることが、うまくいかない場合も考えられます。

震災によって生活は一変しましたが、これからは家族の幸せや笑顔を守っていききたいです。



福島県

叶谷 守久さん(請戸)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：5月30日 「平成26年7月 広報なみえ掲載」

まずは健康でいることと、 自分に言い聞かせています

大震災発生日、津波から逃れる最中に奥さまを亡くされ、ご自分も足に大怪我を負われたため、県外での長期入院を強いられたそうです。退院後は土湯温泉に避難した後、2011年7月から福島市笹谷東部仮設住宅に移られ、別所帯ですが、ご長男家族と共に暮らしていらっしゃいます。



▲40歳代の頃にご夫婦で撮った思い出の写真と共に

■詩吟の先生が訪ねてくださらなかったら、どうなっていたでしょう

3月11日は、いわきでの会議から昼に戻り自宅で一休みした後、勤務先だった相馬双葉漁業組合請戸支所に行き、地震に遭いました。鉄筋2階建の建物が左右に大きく揺れ、地面のコンクリートの間からは水が吹き出していました。咄嗟に津波が来ると思い、急いで帰宅しました。妻は笑いながら倒れたテレビや額の片付けをしていましたが、車で大平山の麓まで行きました。振り返ると、真つ黒い大きな壁とモヤモヤとした水蒸気が立ち上り、私は思わず崖によじ登

り、妻を引き上げようとしたしましたが、左足が木の根に引っかかり、手を放してしまいました。山頂に這い上がる人影がありました。ようやく呼びかけにこたえてくれたのは後輩でした。離れ離れになった両親を探しに行つた彼を待つ間、落ち葉を服の中に詰め込み、寒さを凌いでいました。手を借りながら山を下り、瓦礫だらけの中を歩いていると、消防車が通りかかり、浪江町役場に避難できました。

翌朝、避難指示が出ると大勢の人たちが一斉に移動し、私は知人に便乗して南相馬市に向かい、かかりつけの病院に行くと即刻入院、骨折した足の手術をするようになりました。その2日後、南相馬市にも避難指示が出され、17日に白石市の公立刈田総合病院に移され、足の手術を受けました。病院には一人も知り合いはおらず、とても不安でした。

福島市に避難していた息子たちと連絡を取り、妻を探しました。二本松や相馬の遺体安置所を廻り、ようやく6月25日にDNA鑑定によって本人と認められ、7月31日に葬式を行いました。最後まで一緒にいたのに妻を助けることができなかつたことに、自分で自分を責める日々が続きました。そんな時に、詩吟の先生が避難先の土湯温泉に

訪ねて来られ、「声を出してみませんか」とおっしゃいました。周りとの会話がなく声も出ませんでした。声を出して思い切つて出すものですね。それが立ち直る転機となったように思います。

■外出して帰宅する時、本当に情けないと感じます

長男家族とは朝晩一緒に食事をしていますが、これから先、浪江にいた頃のような三世同居は無理でしょう。この暮らしがいつまで続くのかと思うと情けないですが、気力で過ごしています。年々年老いるわけですから、健康のために詩吟や体操、カラオケなどをやっています。

昨年6月、漁協の組合長は退きました。汚染水や放射線量が安全であるということと、食べて安心とは思いません。浜の魚は美味しいけれど、消費者の信頼を得るのは、かなり厳しいと思っています。

津波は天災です。年月が経てば忘れることもできるし、昔から破壊と復興の繰り返しです。けれども原発事故の収束は見通しすら立っていません。除染の仮置き場、復興公営住宅の建設など、浪江の復興は何もかも遅れています。帰還し安心して生活するためにも、環境整備をお願いしたいですね。



柴口 武雄さん・サツキさん(権現堂)

取材者：浪江町役場 舛田・嶋原
取材日：5月30日 「平成26年7月 広報なみえ掲載」

笑顔で会える日が来るのを祈っています

埼玉での避難生活を経て、今年4月から南相馬市で暮らし始めた柴口ご夫妻。赤い帽子がトレードマークの武雄さんは、若いころから興味のある天文や考古学を情熱を持って続けていらっしやいます。奥様のサツキさんは、避難後に新たにパッチワークを始めたり、日本舞踊を再度習うなど何事にも意欲的です。

現在入居されている施設では、ご夫婦が隣同士のお部屋のため、壁を“トントン”とノックして“おやすみなさい”の合図をなさるなど、穏やかに暮らしながら、浪江を忘れることなく帰ることを願っていらっしやいます。

息子のお嫁さんの実家がある山形で2週間避難させてもらってから、娘のいる埼玉で3年過ぎました。埼玉は大変気候の良い所で風邪ひとつひかず、近所の人にも良くしてもらい、友人もできて楽しく暮らしましたが、ずっと福島に帰りたいたって思っていました。

4月に息子家族が家を建てて引越すことをきっかけに、私天文に興味を持ったのは中学生の頃で、20年ほど前から日食を観るためにブラジル、タイ、アフリカ、中国など海外にも行き、撮った写真をマリンパークや役場に飾ってもらったりしていました。避難していた埼玉は、予想以上に星空が綺麗で、妻に星の名前を教えることができました。南相馬でも二人で星空を眺めています。住まいの近くに



▲ご友人が撮影した日食の写真を手にする武雄さんと手作りのパッチワーク作品を手にするサツキさん

たちも南相馬で暮らすことになりました。離れた家族と集まれるようになり嬉しく思います。浪江の自宅には、望遠鏡や専門のカメラを設置した手作りの天文ドームがあります。趣味の天文に打ち込めると思っていた時に震災が起きました。今は、そのままにしてきた機材が使えるか心配です。

ある古墳は、高校生の時に測量に参加し史跡指定された桜井古墳で、先日は二人で散歩して写真を撮ってきました。アルバムを作っていますが、もう一度行って説明文をつけて完成させたいと思っています。住まいには、息子の手作りの神棚があり、毎日、一番初めに頼むことは、放射能が早くなるようにという事です。町長が浪江を直して呼んでくれるから大丈夫、将来は浪江に帰れると思っています。元気にやっていますが、町には1日も早く帰れるようにお願いしたいです。

*サツキさん

埼玉にいる時に何かがないといけないと思って、大正琴やパッチワークを始めました。その時できた友人が今も生地などを送ってくれるのでパッチワークを続けています。6月からは、浪江で10年やってきた日本舞踊を週1回始めることにしました。浪江のことを忘れたことは一度もなく、海の匂いを思い出します。浪江に帰って、みんなと笑顔で会えるようにと祈っています。



小野田康浩さん(幾世橋)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：6月5日 「平成26年7月 広報なみえ掲載」

仮設の生活には慣れたけれど、 だんだん腹が立ってきました

小野田さんは浪江で生まれ、ご両親の仕事の関係で東京に育ちましたが、浪江の祖母が亡くなったことをきっかけに、約10年前にご家族で浪江に戻ってこられました。震災前に脳梗塞を発症し、その後遺症のために休職中とのこと。

現在お住いの二本松市岳下住民センター仮設住宅では、三代目の自治会会長を2年務めていらっしゃいます。

■まさか、まさかの連続で、寒かったことだけ覚えていきます

あの日は、母と一緒に家に居ました。相当な揺れでしたが、母屋のグシ瓦が崩れ、壁に亀裂が入ったものの、さほどの損害はありませんでした。停電でしたので、蝋燭と石油ストーブで夜を明かしました。時々大きな余震があり、その度にストーブを消したり点けたりしていました。

翌朝午前6時頃に避難指示の放送があり、母を隣家に預け、私は犬を連れて浪江高校に行きました。そこから苅野小学校に移動すると、バスに乗せられ津島に向かいましたが、2時間くらいしか滞在しなかったと思います。川俣高校体育館に避難しましたが、4月に高校の授業が再開することになり、月半ばに川俣町の旧小島小学校に移り、さらに猪苗代町の民宿に二次避難をしていました。

避難の際に離れ離れになった母は、隣の家族と共に二本松市東和の体育館に避難したものの、気管支を患って二本松病院に入院しました。私も何度も猪苗代から通いました。病院から介護老人施設「サンビュー」へ移り、仮設住宅に入居する1カ月前の7月に亡くなりました。入院中に友だちが出来て退院したくなかったように、移転先の「サン

ビュー」から仮設住宅に移ろうという時も、友だちと離れることは相当な精神的な苦痛だったようです。母だけでなく、避難している多くの方も血圧が高くなったり、体調が悪くなったりしていたようです。

■仮設での生活がいつまでなのか、復興公営住宅はいつ入れるのか、知りたいです

この仮設住宅64戸のうち、今は53世帯が住んでいます。二本松病院が近いからか、透析を受ける方が結構います。買い物は徒歩圏にヨークベニマルやコメリ、しまむらなどがあり、便利な所です。また、帰宅困難区域の方だと思いますが、ここを出て二本松市内や大玉村、福島市等に自宅を再建された方もいらっしゃいます。

集会所は卓球や縫物を楽しむ住民が利用したり、定期的な支援活動団体さんが訪れてお茶会や体操教室などが開かれたり、野菜の差し入れもしてくださいます。



▲年末恒例、絆まつりの写真の前で
この地域全体のお祭りは、岳下住民センターの住民ばかりではなく、永田農村広場仮設住宅や市内の借上げ住宅の方々も参加され、地域の方々やJICA二本松（独立行政法人国際協力機構）や支援活動団体の協力により賑やかに開催されているそうです。

ます。毎週火曜日には近所の農家さんによる野菜の移動販売もあります。自治会では集会所の非常口を窓ではなく掃出し戸にして欲しいとか、雨漏りがする風除室を修繕して欲しいなどの要望を町にお願いしているのですが、なかなか難しいようですね。今、個人の望みは、復興公営住宅を早く建てて欲しいというところだけです。はっきりとした時期を示せない町の立場も解りますが、やっぱり先の見通しを知りたいというのが本音ですよ。



柘谷 拓郎さん(権現堂)

取材者：浪江町役場 舛田・嶋原・中川
取材日：6月30日 「平成26年8月 広報なみえ掲載」

“Now or never” 今やれることは、一生懸命やろう

さわやかな明るい笑顔の柘谷さんは、日本DMAT*の資格を持つ看護師さんです。お世話になった方々へ、今度は自分が恩返しをしたいという気持ちを強く持っていらっしゃいます。震災により、たくさんの友人と離ればなれになってしまったことで、あらためて友人の大切さが実感できたとおっしゃいます。



▲さわやかな明るい笑顔の柘谷さん

震災当日は、夜勤明けで自宅にいました。家族の安否を確認した後、町の状況を見て職場が大変なことになっているだろうと考えて、すぐに南相馬市立総合病院に向かいました。津波被害に遭われた方や家で怪我をされた方を救命していく状況で、そのまま3日間泊まり込みました。14日に職員へ避難命令が出たため、山形に1週間避難しましたが、病院業務を再開することに南相馬市のアパートで暮らすことに決めて仕事を続けました。その頃、新潟や山形のDMATが来て病院支援をしてくれました。DMATは、



▲ソフトボールチーム「浪江大吉SSB」のチームTシャツのロゴ

多くの患者さんを少ない医療資源で救命していく医療チームです。私も研修を受けていたのだと思います、その後、日本DMATの資格を取りました。今度は自分が、お世話になった人たちに恩返しをしていく立場だと思っています。

震災の年の5月に、避難者の健康状態をみるために1か月間、新潟県長岡市に派遣されたことがあります。その時、協力してくれた方が、「仕事だけど、自分たちも被災者だから心を休めるのは大切だよ」と、声を掛けてくれて、自分の気持ちを助けてもらったことが心に残っています。また、仕事だけでなく、所属していたソフトボールチーム代表の避難先だったご縁で、山形県東置賜郡高畠町の総合体育祭・ソフトボール大会で、仲間と久しぶりに集まり浪江町チームとしてソフトボールができたのはすごく良かったことです。参加させてもらって、温かく迎えてくれた高畠の方々には感謝しています。毎年の大会が楽しみで、これからも交流が続いていけばいいなと思います。お世話になった方

に、物や形でなくても、参加して盛り上げていくことで恩返しをしたいと思います。

大学生の時は東京に住んでいましたが、卒業後は浪江町に戻りました。

浪江町は海も山もあり、家族も気心の知れた友人もいたので、都会と比べて不便は感じませんでした。避難指示が解除されても、簡単には帰れないかもしれないませんが、31年育った町なのでみんなと集まって「久しぶり！」と言いたいです。

震災前は、当たり前だと思っていた日常生活でしたが、親しい人が亡くなって、明日がいつも通りあるかわからないことを知り、1日1日を楽しく生きようと思っています。

ソフトボールチーム「浪江大吉SSB」のチームTシャツにあるNow or neverのとおりに、「今は今しかないのだから、今やれることは一生懸命やろう」そう思っていますし、皆さんに、そう伝えたいです。

*DMAT：災害時に被災地に迅速に駆けつけ、救急治療を行うための専門的な訓練を受けた医療チーム



山田 正博さん(大堀)

取材者：浪江町復興支援員茨城県駐在 石田・大山・田中・八橋
取材日：6月25日 「平成26年8月 広報なみえ掲載」

伝統工芸の技術を後世へ伝えるために・・・

浪江では、伝統工芸品の「大堀相馬焼」を作っていた山田さん。現在は、茨城県つくば市に避難しながら福島県矢吹町に工房を構え、忙しい毎日を送っています。



▲現在の山田さん



▲年末に集まった山田さん家族

■ 当時を振り返って

地震発生時は、町内のホームセンターにいました。家族と工房が心配になりました。戻ってみると、自宅と家族は大丈夫でしたが、工房の中は足の踏み場もないくらい滅茶苦茶になっていて、手が付けられない状態でした。当然、作品も全て壊れてしまっていました。翌日から家族と親戚10人で県内外を転々とし、平成24年12月に茨城県つくば市に一旦落ち着くことができました。

■ 伝統を守って

震災後、何もすることがなく体を持って余していたところ、「何とか伝統を守っていかねければならない」と思い、以前からの知り合いを通じて矢吹町に工房を開くことを決めました。しかし、その工房は仮設的な建物なので耐久性もなく契約期間も5年のため、その後続けていくには「また、ゼロからスタートしなければならぬ時が来るんだな」と考えると不安になります。また、震災前一緒に仕事をし

ていた息子は現在、東京で陶芸教室の講師をしており、それが本格的になってしまったら、一緒にできなくなってしまうのではないかと思ひ、震災前の暮らしを思い出すと寂しい気持ちになります。

しかし、伝統工芸の技術を後世につなぐために、強い気持ちを持って、自分ができることを精一杯やっていたと思います。今の頑張りが今後10年、1000年と受け継がれていくことを望んでいます。

■ 仲間と共に

いろんなことが落ち着きはじめたので、今年6月に友人3人と鮎釣りに行くことができ、久しぶりに釣り仲間と会えて嬉しかったです。また、矢吹町の工房とつくば市の借上げ住宅を行き来するといった忙しい毎日を送っていますが、つくば市に避難している近所の方々と浪江町の思い出話をしながら、月に一度呑み会をするのが何よりの楽しみです。



西 康至さん（立野）

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：7月11日 「平成26年8月 広報なみえ掲載」

今も元気に



▲家族4人、全員勢揃いで。
（左からシオさん、貞治郎さん、康至さん、久美子さん）

西さんは妻シオさんと息子の貞治郎さん、久美子さん夫婦と4人で、福島市笹谷の借上げ住宅で暮らしていらっしやいます。

今回の取材では、康至さんのお話を貞治郎さんが補足してくださったり、剣道の資料を見せてくださったり、父子お二人からお話を伺うことができました。病後のリハビリをされているシオさんの一日も早い回復と、腰痛が辛そうな久美子さんの痛みが少しでも楽になれるといいですね。

大地震があった3月11日は、庭の掃除などをしておりました。突然の激しい揺れに、思わずしゃがみ込みました。屋根の瓦は落ち、家の中では冷蔵庫が跳ね上がって、びっくりしました。酪農をやっていたので、牛舎の中で牛が吠えるように啼いていたのを覚えています。私たちは親子3代夫婦とひ孫2人の8人で暮らしておりまして。直ぐに停電になり、水も使えなくなり、地域の酪農家と発電機を持ち回りで使っておりまして、原発が危ないということで、家族全員で逃げましたが、

残された牛たちはどんな気持ちでいたのか、胸が詰まる思いでした。

南相馬市の馬事公苑にその2日後、避難しました。その後、市が用意したバスで、伊達市の梁川体育館に移動しました。雪は降る、断水になる、余震はある、お世話してくれた方々は大変だったろうと思います。ここで家族は一旦それぞれ離れることになりました。その後、猪苗代に移り4か月お世話になり、7月下旬に酪農家の友人の紹介で、現在の家に落ち着きました。

息子の話によると、「最初の一時帰宅の時はどこも草ボーボー。牛舎には苦しんだであろう牛たちが骨になって迎えてくれた。水を求めて側溝に落ちた牛の死体。あまりにも酷い光景だった」とのことでした。牛も家族の一員です。原発事故さえなかったらと思うと、怒りと悔しさで忘れられません。また避難中は、津波で家族や家を失った方々のことを思えば、牛のことなど、とても話せませんでした。

私は、30代の時に神経性の病に罹り、3年間農業を休みましたが、剣道をするることによって

病気を克服し、その後剣道7段教士を頂き、体に自信を取り戻すことができました。苧野剣道スポーツ少年団では、若い先生方と一緒に子どもたちと稽古に励み、汗を流すのが楽しみでした。

震災の1週間前、3月6日には第25回牛乳杯争奪少年剣道大会が開催されましたが、これが一区切りとなってしまい、大変残念です。各地にそれぞれ避難されましたが、その年の7月、白河で行われた中体連では、浪江町や双葉郡内の方々にお会いすることができ、大変嬉しい時間でした。

避難して3年が経ちましたが、家の近くには浪江の仮設住宅もありますので、何かと心強く思っています。また、孫やひ孫がお盆や正月にここに来る時は、とても賑やかになり、楽しみです。

スポ少や各種剣道大会を見学に行つては刺激を貰い、リハビリのつもりで竹刀の素振りや毎日しております。高齢なので病院が近いことも精神安定剤のようになつていきます。なるようにしかならないので、今を元気に生きたいと思えます。



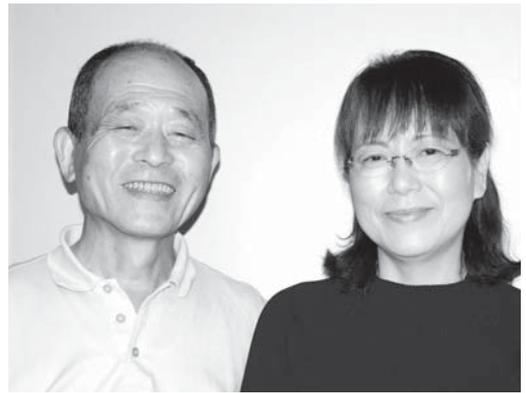
今野 秀則さん(下津島)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：7月9日 「平成26年8月 広報なみえ掲載」

人がつながって生きていくことや、ふるさとの祭、伝統芸能。そういった全てが断ち切られたことが、悔しくてなりません。

震災当時、今野さんは(社福)福島県社会福祉協議会に勤務され、同時に下津島地区の行政区長さんも務めておられました。その今野さんは、地区の人々16人から聞き取った被災の記録『3.11ある被災地の記録 浪江町津島地区のこれまで、あのおとき、そしてこれから』を上梓され、読売新聞(2014年7月6日福島版)などに大きく取り上げられました。

今回は、奥さまの芳子さんと共に「聞かれる側」になっていただき、震災当日から今日までのこと、ご近所や地域での交流など、さまざまなお話を伺いました。



▲仲睦まじく、素敵な笑顔をみせてくださった秀則さんと芳子さん。芳子さんは避難後、いろいろな会に参加するなど、ご自分の趣味を楽しむ時間が増えたそうです。

■私は福島市の仕事場で、妻と娘は外出先の原ノ町で、大震災に遭いました。物凄い揺れに、立つて歩けないほどでしたが、机上のパソコンを手で押さえながら収まるのを待ちました。職員と共に外へ避難したものの、歯の根も合わないほど寒かったし、極度の緊張もしていました。頻繁に余震があり、その度に駐車場の車が大きく揺れました。急いで家族に連絡を取りましたが、自宅にも子どもたちにもつながらず、そのうちようやく娘からメールが来て無事を知りました。芳子さんによると「原ノ町でも大きな揺れだったので、原浪トンネルを避けて山麓線で帰ろうとしたけれど、馬事公苑の辺りでこの先は通行できないと言

われました。国道6号に出ようとしたが、思い返して原浪トンネル経由で戻りました。あのまま走っていたら津波に遭っていたかもしれない。今思うと、本当に怖いです。原ノ町は多くの家の瓦が落ち、大変なことになるっていました。」
日が暮れるころようやく建物の中に入り、今後の対応に関する協議をした後、帰路に着きました。川俣町は停電のため真つ暗で心細くなりましたが、山木屋を越え、津島の家々の明かりが見えた時には本当に安堵しました。帰宅すると、築130年の古い家や10年程前に建てた家の中は壁が落ち食器類が落下して割れるなど散々な有様で、親子3人、こたつで服を着たまま寝ました。

■翌日から4日間、津島は人と車で溢れていました。12日早朝、町から大勢の町民が津島に避難をするので地区の集会所で受け入れをして欲しいとの要請があり、役員の方々とその準備に追われました。また、我が家は元々旅館と煙草の小売を営んでおり、幾世橋の恩師家族をお泊めしたり、煙草を売ったりしていました。津島の人口は1,400人程ですから、7倍を超す1万人以上が避難して来たと思います。小中学校のグラウンドから溢れた車が路肩に駐車。その間を進もうとする車が列をなし、荷物を抱えて歩く人も大勢いました。本当に見たことのない光景でした。15日には全町避難が決まり、津島の混雑は無くなりました。妻と娘は福島市の妻の実家に一足先に避難し、私は翌日まで地区の人たちに声をかけてから合流しました。4月になると就職した娘のパートに移り、翌年5月には、私の定年退職と時期を同じくして娘が原ノ町に転勤し、一緒に移動しました。



山形県

高野 康幸さん(請戸)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田

取材日：7月2日 「平成26年8月 広報なみえ掲載」

浪江でのつながりも、山形でのつながりにも感謝しながら暮らしています



▲「ウチョウラン」がきれいに咲きました。
高野さんご家族（左：サダ子さん、中央：タキ子さん、右：康幸さん）

浪江のころ通信第19号に掲載された高野さんご家族は、現在も3人で山形県中山町の借上げアパートで暮らしています。母・タキ子さん、康幸さんサダ子さんご夫妻、それに近くに住んでいる娘・博美さんご家族と支え合いながら生活しています。大好きな山野草を育て咲かせることがなよりの楽しみだそうです。

今年南相馬か相馬に引越そうかと考えていましたが、娘に「あと3年は近くにいてもらえないか」と頼まれて、もうしばらく中山町にすることにしました。ここに一緒に逃げた時から孫たちが大きくなるまでは近くにいたいと思っていました。孫の翔は山形の高校に入学し、部活動の野球も本当によく頑張っています。私も朝5時半にグラウンドまで送り届けたり夜遅く迎えに行ったり。妹の稜もバスケットボールを始め、父親母親も仕事にPTAにと忙しいよう

です。母は今年94歳になりましたが、どこも悪い所痛い所がなく体が変わりなく安心しています。

震災後1度目の一時帰宅した際、大切に手入れしてきた自宅の松、藤、つじが津波に負わず残っており、目印にして帰りました。藤は花芽も持つていて当時とても元気づけられました。ですがその後、木は跡形もなくなってしまう、先日帰宅した際、土地の上には大きなコンクリートが移動されていました。自宅の姿形はなくなってしまうましたが、自分の土地には変わらず、大切にしてきた想い出があり、荒れていく土地を見ると憤りをどこに向けたらよいかわからない時もあります。

今も浪江町には必ず春、お盆、秋と墓参りに帰っています。地区によっては、車の中でも線量計の警報が鳴る場所もあり、線量が高い場所もあるということを実感する時もありました。先日、集団移転の意見交換会に参加し説明を聞きました

水は安全なのか、何十年後かに地下水が汚染される危険はないのか、生活基盤ほどの程度整うのか、また次世代の若い人が戻らない中、高齢の者ばかりが集まっても暮らしていくことは難しいのではないかなど、不安も感じています。

ここ中山町にいても、浪江町にいた頃から付き合いがあった皆さんとは、今まで通り連絡を取り合っており、さくらんぼ狩りに来てくれる方もいました。心配してくれる人は遠くにも心配してくれそうです。また、避難してきた当時から誘ってくださる近所の方々のお宅に2、3日おきにお茶のみに誘ってもらい、ちょっと顔を出さないと「どうしたの?」と声掛けしてくれます。また、避難者を無料で入浴させてくれた中山町の温泉施設『ゆらら』のスタッフの皆さんも親しくしてくれており、今は恩返しに、お風呂掃除の手伝いもしています。浪江町にいた頃つながりも、こちらに来てからのつながりにも感謝し、家族とも協力しながら、もうしばらくこちらで暮らしていきます。



木村 幸高さん(酒田)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：7月27日 「平成26年9月 広報なみえ掲載」

仲間と楽しく話げできた浪江の生活を 懐かしく思い出します



▲スナックエルベ（山形県南陽市）にて
終始優しい表情でお話を聞かせてくださった木
村さん。

木村さんは、山形県南陽市の借上げ住宅に単身で暮らしています。口下手だからと恥ずかしがりながらもお話ししてくださった木村さん。「こっちに來たら來たで、つながりもできて暮らしやすいよ」とにこやかにお話をされていましたが、これからの生活に不安も抱えているそうです。

普段はふれあいセンターなみに勤務しており、地震のあった11日は16時から仕事でした。地震の後、職場は避難してきた人でいっぱいになりました。近くの幼稚園も借り、水と電気が止まっていたので、トイレや食事の水を用意したり、発電機を用意したり。その後、落ち着いたので22時頃、一旦私は自宅に帰りました。帰ると、同じ住宅に住む皆が集まっているし、まずは安心だなと思ひ、その日は床にいたので、翌日朝起きたら誰もいなくなっていました。電気も使えなかったため原

発事故の情報も知るすべがなく、どこに避難すればよいかわからず、17日に自衛隊が救助にくるまで自宅で過しました。

その後、よく行っていた『スナックエルベ』の福原さんが知人を通して連絡をくれ、「自分が避難している山形にまず来てはどうか」と言ってくれ、福原さんの義理の息子さんに迎えに來てもらい、山形県南陽市に避難しました。福原さんの娘さんと以前同じ職場だったことが縁で仲良くしてもらっていました。本当にありがとうございました。

浪江では、あんまり出歩かなかったけれど、職場の人と一緒によくパークゴルフや釣りをしていました。こちらに來てからは仲間がいなくてなかなかできていません。前震のあった3月8、9日も請戸でパークゴルフをしておりすごい揺れでしたが、皆逃げようとしなかったですね。11日も4人で行く予定でしたが、仕事で行けなくなり今思うと行っていたら危なかったと思います。

この3年の間には、家に閉じこもり正直誰とも会いたくなくなつた時期もありました。賠償について心ない言葉を投げられ

ることもありました。ですが、こちらに來てから福原さん家族や避難先のたくさんの方にすぐ世話になりました。声を掛けてもらっていたので出かけていたけれど、声を掛けられなかったら閉じこもってしまったかもしれせん。知らない土地に來ましたがとても心強かつた。恩返しができることを申し訳なく思っています。昨年住まいの近くに『スナックエルベ』が営業を再開し、ちよくちよく遊びに行き楽しく過ごさせてもらっています。

どちらにしろ、生きている間に浪江に歸れないとは思っているのですが、これからどうなるのか心配です。いづれ借上げ住宅の補償が打ち切りになつたら、家賃がどれくらいかかるのかわからないですし、私は一人暮らしで頼るところがなく、住まいへの不安は大きいです。また、毎日楽しく過ごしていた仕事や仲間との時間を奪われてしまったのも大変残念です。浪江にいたら、老後の設計が立てられたと思うことがあります。復興住宅を早く建ててもらいたい、それが今一番の望みです。



上野 昭平さん(立野)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：8月11日 「平成26年9月 広報なみえ掲載」

帰ってみることは出来るけど、 住むことはできない

昭平さんは本宮市恵向仮設住宅にお住まいで、隣には長男の明宣さん一家がおられ、一緒に暮らしていらっしゃいます。

浪江では、養豚業を長年営んだ後、イチジクやふき、わらび、みょうがなど野菜を直売所や市場に卸していた昭平さんは、住宅の軒先で自慢の野菜作りに精を出していらっしゃいます。

また、常福寺(浪江町権現堂)の総代も務められ、故あって震災前の平成18年には、北陸へ上野家の御先祖を訪ねる旅をされた行動的な方で、今年86才を迎えますが、大変元気です。



▲昭平さんを囲んで、長男の明宣さんと妻、みき子さん。明宣さんとみき子さんは「浪江の家に帰って、東京オリンピックが観たい」とおっしゃっていました。

■避難中に病に倒れて

震災当日午後2時30分頃、私は家の中にいたけれど、随分長い揺れだったな。屋根のぐしは全部落ちてしまった。孫が4kmも離れている仕事場から、「大丈夫か」と駆け戻ってくれたことは、本当に嬉しかった。忘れられません。

翌朝に避難指示が出て、息子たちは津島中学校に避難しましたが、私は山麓線で原町のいとこの所へ向かいました。けれどその晩には家に戻り、水や電気

が止まっていたので即席ラーメンを食べた。避難のために津島に向かう人が「家の窓が開いているぞ。誰が逃げ遅れていないか」と言ってくれ、長男が知り合いと一緒に迎えに来てくれたんだ。

津島から福島市南向台の次男の家へ行つて、私は1か月くらい居たかな。息子たちには1週間世話になったけれど、地元情報が少ないのであづま体育館に移ったんだ。その後、家族が合流して磐梯町の七つ森ペンションに避難し、4月から8月まで居た。浪江の人も5所帯ほどいたなあ。避難先はやっぱり寒かったのかな、4月半ばに急性肺炎で会津若松市の竹田総合病院に1か月ほど入院し、9月1日にここに越して来た。

■出来ることなら帰りたいけれど

恵向は便利がいい所だし、仮設住宅とはいってもちよつとマシなように思うな。

一時、腰痛が酷くて、近くの谷病院へ1年間通つて治りつつある。最近では週2回、院長先生

の診療日に通院しているよ。車を運転して浪江にも時々帰つてる。まちの復興も復興住宅の建設も遅れているけれど、除染は大分進んでいるようだ。ただ立野は昔、飛行場にする計画があったほど平らな土地で、広い田畑が広がっている。これを全部するのは大変だろうな。

一生が過ぎるのは早いと思う。浪江に帰れるかどうかかわらないけれど、私の父は米寿の祝いをしたから、そのくらいまでは元気でいたいなあ。



▲恵向のご自宅の前で。



神奈川県

鈴木 卓さん(請戸)

取材者：コミュニティ・ワークス 青木

取材日：7月6日 「平成26年9月 広報なみえ掲載」

ほんとはもっとみんなで集まって話したい！

▲こうたくん(7歳)、りんかちゃん(4歳)
いわき湯本にて

「もう3年になりますね。なんかもう落ち着きすぎた感じです」と、お子さんの成長を見守りながら将来に思いを馳せる一方で、復興には想定も想像もできないくらいの時間がかかっている、物事が進まないことへの苛立ちを感じている様子が見えま

■横浜でやりがいのある仕事に就く
二次避難で旅館や温泉施設に避難していた山形から横浜に出てきたのが5月。まずは自分一人であって、1か月くらいで住む所を見つけた。東京や神奈川県に親戚がいて、応援するよと言ってくれたのがきっかけでした。
ちょうどそのゴールデンウィーク前に仮設住宅の応募の話があって、父親から「お前たちはどうする？」って聞かれましたが、自分たちは申込みませんでした。それから両親が仮設住宅に入居したのは夏前だった

と思います。自分たちはもう横浜に来てからの話でしたね。

横浜で妻と子どもと一緒に暮らし始めて、その後、仕事が決まったのは9月頃でした。もつと仕事は豊富にあるんじゃないかとイメージしていましたが、実際は決まるまで大変でした。決まってからずっと今の太陽光発電システムを取り扱っている会社で働いています。今回の震災と原発事故があったことで、クリーンで再生可能なエネルギーに魅力を感じてやってみたいと思います。これからのことを考えて取り付けてくださるお客様も多いです。最近出張で、茨城、山梨、長野、静岡に行きますけど、地方の需要は伸びていると思います。東北にも支店があり、これから忙しくなるとい話は聞いています。

■揺れ動く心境

横浜に来てこの生活にも馴染んできていますが、そもそもここでずっと暮らすということまで考えて移動してきてはいないので、3年も経って落ち着いてはきていますが、福島で親が仮設住宅に入っている状況です

し、自分は長男なので、戻れるならば戻りたい気持ちは当然あります。

反面、今3年以上たった状況で、戻れないなら戻れないでもいいって、個人的な考えですけどね。戻れないの次の新たなステップを踏むために、一から新天地で基盤をつくっていくかなければならない。そういったところへの支援策を考えてほしいですね。

■同じ悩みを持った者同士で話ができる場がほしい

3年というところ、一つの節目や区切りのような感じですけど、これからみんながどう動くか、どういう考えをしているのか、今後どう生活していくのか、ほんとはもっと同年代で集まって、同じ悩みを持った者同士で話ができる場がほしいと思います。例えば、子育て世代とか親世代とかですね。時間をつくるのは難しいですけど、何か設定があつて早めに連絡があれば、合わせられるかなとも思います。何も考えずに今のまま突き進めるならそれが一番簡単ですけど、そうもいかない。それが悩ましいです。



漆原 恒男さん・トシ子さん(西台)

取材者：浪江町役場 舩田・嶋原・中川
取材日：9月3日 「平成26年10月 広報なみえ掲載」

浪江の人たちといると心が和みます

恒男さんは浪江のご出身。南相馬市原町区にある建設会社にお勤めでした。南相馬生まれのトシ子さんは、卒業後に東京で13年間仕事をし、福島に戻って恒男さんと出会いました。「私たちの子ども」とおっしゃる動物たちとともに、現在いわき市内の借上げ住宅にお住まいです。



▲避難中もずっと苦楽を共にしている猫のミルクちゃん、犬のもみじちゃんと。2匹とも幸せそうです。

■避難先では人に恵まれて
ご自宅が西台のため、津波被害の甚大さは翌朝まで知らなかった、というお二人。避難指示が出た後は、恒男さんの仕事の関係もあり、多くの浪江町民とは別のルートで避難しました。昨年11月に現在のいわきへ移るまでの2年8か月、原町区⇩新潟県小千谷市⇩再び原町区⇩二本松市⇩長野県松本市と居を移してきました。

トシ子さん「小千谷では『中越地震のときの恩返し』ということで、救済物資も豊富で、大変良くしていただきました。その後、主人が会社で行方不明者捜索に協力するため原町に戻り、

私はボランティアで、津波被災地で見つけた写真をきれいにして掲示する仕事などに携わりました。そこで松本から支援に来ていた方と知り合い、誘っていただいたのです」

恒男さん「松本では、思いやりのある方々に囲まれて最高でした。空気もよく食べ物もおいしい。すばらしいところでした。そこで新たな仕事に就いたのですが、慣れないこともあって体調を崩し、ほどなく引退しました。松本はとても気に入って2年半ほど暮らしましたが、やはり浪江からは遠い。西台の家はネズミ害などで住めない状態ですが、それでも我が家です。頻りに手入れしに帰れるよう、浜通りへ戻ることになりました」

■いまの暮らし
引退されたとはいえ、お二人はとても活動的です。恒男さんは釣りやパークゴルフを楽しむほか、朝晩犬と散歩するのが日課。1日15,000歩が目標だそうです。

トシ子さん「松本時代に始めたプリザーブドフラワーのサークル仲間が、先日ここ（いわき）を訪ねてきてくれたんですよ。だから次は私が会いに行く予定です。たまに東京に行つて、会社員時代の友人と会うこともあります。二本松の仮設には姉が、南相馬には兄がいますし、

浪江にもよく帰りますから、家にはほとんどいませんね(笑)」

■「帰りたい」と「帰れない」の間
浪江は日本で一番いい町、というお二人は、3年後に本当に帰れるのか疑問が拭えず迷っている状態だといいます。

恒男さん「周囲には（指示が解除されたら）すぐ帰るといふ人もいるし、もう他所で家を買った人もいる。一方、帰れるようになったら（建てた家を）売って帰るといふ人もいる。復興公営住宅も遅れているし、ペットがいる世帯はそれでも後回しなのではないか。私たちも家を建てたほうがいいのか、悩んでいます」

トシ子さん「浪江は自然が豊かなのでした。毎日請戸の市場で新鮮な魚を買つて、ご近所の人たちとおしゃべりして。そういう普通の暮らしを取り戻したい。でも、津波被災地でボランティアをしたとき思いました——家は流されても、人が残っていれば必ず再興できます。松本では主人の運転中にもらい事故に遭い、私は大ケガをしました。死ぬかと思いましたが、今こうして生きています。それは、まだやり残したことがあるということです。悔しいことも心配ごともたくさんありますが、日々をしっかりと生きていきたいですね」



福島県

畑中 武さん・ヤイさん(中浜)

取材者：浪江町役場 舛田・中川

取材日：10月2日 「平成26年11月 広報なみえ掲載」

今も浪江の夢を見る。でも前を向いて生きよう。

浪江に生まれ育って80年。畑中さんは人生で二度、家をなくされました。一度目は先の大戦での空襲。そして東日本大震災。息子さん夫婦と3人のお孫さんに囲まれ、幸せな暮らしを送っていた中浜の自宅は、津波にさらわれました。一度はバラバラになったご一家ですが、現在はいわき市に新築されたご自宅で、再び皆さん一緒に平穏な暮らしを取り戻しておられます。



▲仲睦まじい畑中さんご夫婦です

■大切なのは命と人の情け
震災当日、家族7人はみな違う場所にいましたが、奇跡的に全員が無事でした。私と妻は、地震のあと一度自宅に戻り、テレビで津波警報を知ったのです。到達まであと10分。「逃げろ！」と叫びました。別の場所にいた息子は、バックミラーで津波が追いかけてくるのを見ながら必死で逃げ、間一髪で山の斜面をよじ登って助かりました。
そんな経験を経て思うことは、まず一番大事なのは命。そして次に大切なのは、人情です。その後の生活では、本当に人の情けに助けられました。

震災の翌日、私たちは会津に向かいました。息子の大学時代の同級生が会津にいて、呼び寄せてくれたのです。避難所で朝一杯の粥だけ飲み、70キロの道のりを自分で運転していったのですが、到着後は疲労困憊で倒れてしまいました。救急車で搬送されましたが、幸い事なきを得ました。
会津では、そのご一家に大変よくしていただき、3週間ほどお世話になりました。3月末に東京に住む娘が迎えに来てくれて、そこから2年ほど、東京都江戸川区の住民となりました。地元の老人会に入って、旅行にいたり、いろいろな活動に参加しました。そこで知り合った方に手作りの仏像をいただき、その話が新聞に大きく載ったこともあります。ほかに、私は自作の紙芝居で子供たちに昔話をきかせたり、もちろん大震災の話もしました。昨年2月に東京を去るときは、送別会まで開いてくださり、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

■戻らない、でもつながっていい
今のいわきでの暮らしは幸せです。浪江には帰る家がないし、あの一帯はもう人が住めない場所になってしまった。戻るつもりはありません。でも骨を埋めるのは、やはり故郷の浪江なんです。だから大平山に新しくできる共同墓地に、墓を作ることになりました。墓碑銘は「ありがとう」。お参りにきてくれてありがとう、生んでくれてありがとう、その二つの気持ちが合わさる場所になるように。そして裏面には、子孫のための記録として東日本大震災で中浜の家屋が流出したことを記し、「このようなことが二度とないように。合掌」と刻印しました。
私は若いころから山登りが趣味で、76才のとき富士山登頂も果たしています。だから足腰は丈夫なはずですが、東京に引越したころ、どうにも足が震えて歩けなくなることがあります。でも「こんなところで死んでたまるか」と気持ち奮い立たせ、50歩から始めて最後は7、000歩まで歩けるようになりました。
医者に言われたのは、「気持ちをおだやかに持ちなさい」ということ。今でも浪江の夢を見ますし、東電への怒りはもちろんあります。でも起きてしまったことはどうにもならない。「前を向いて生きる」。これに尽きませぬ。私の人生に悔いはありません。



鈴木 悦夫さん・良美さん(田尻)

取材者：コミュニティ・ワークス 青木

取材日：10月9日 「平成26年11月 広報なみえ掲載」

四季の移ろいを楽しみながら、 元気で長生き！

実家のある平泉で暮らしはじめて3年7か月。「今年くらいからやっと落ち着いてきた感じがする」と時間の経過とともに変化してきたお気持ちをふりかえり、ご家族やご近所の方のお付き合いを大切にしながら、またその存在のありがたさを実感する日々。目の前には金鶏山、その麓に広がる四季折々の表情に癒されて、お二人とも楽しみながら暮らしておられます。



▲「ここまできたら長生きしないとね」という良美さんのとなりで、にっこり微笑む悦夫さん。

■懐かしい浪江
良美さん 平泉へ来たのは、震災があつて3日か4日後でした。地震の後に家の片付けをしていると、原発のことで無線連絡があり、どこでもいいから逃げてくれる。その頃は腰が悪かったので、床に座れる状態ではありませんでした。避難所に行つても迷惑をかけることになるので、実家に連絡をとり、こちらに来ることにしました。実家でも心配していたので、顔を見られて安心したようでした。今では文句を言い合いながらも、近くにいたるありがたさを実感しています。
今住んでいるところは眺めがよく、毎日自然の移り変わりが

楽しんでいきます。朝は北上川から雲がかかって山が浮かんでいるように見え、夜空も綺麗です。そう、ちようど皆既月食も見ましたよ。主人がカメラで撮っていました。夏は前沢の花火、お盆には金鶏山の大火、これからの季節は紅葉も楽しめますね。冬は金鶏山や手前の田んぼの雪景色もとっても綺麗で、景色がほんとに変わります。風も入って気持ちがいいのですが、夏、蝉の声がうるさすぎるのが難点かしらね(笑)。
こちらに来た頃は言葉もただどしく、よそ行きの言葉を使つていましたが、今ではだいぶこちらの生活に慣れました。「みなさん平泉にいつぱい来てください！」つて、観光客を迎える側の気持ちで、もう地元気分です。

町からの通信を見たり、テレビに出ている町長さんを見たりすると、懐かしいなと思いますね。「浪江」つて聞くと耳がピツと反応しますね。

■いまはここで、のんびりと
悦夫さん そもそも浪江で暮らすようになったのは仕事がきっかけでした。盛岡の警備会社に勤めて、その現場が福島原発でした。最初は大熊で暮らしてい

ましたが、4、5年経つて浪江に越してお世話になるようになり、家を構えました。やつと家も支払いが終わつて、これからのんびりしようという矢先に、あんなことになつちまつてね。
震災の時は、別の会社に勤めていたので相馬で仕事をしていました。私は津島の避難所に一晩いて、翌朝家に帰つてきたら、おつかあが帰つていたので。大熊の務め先から6時間かけて、家に戻つたそうです。どこに行つたのか心配で、会えるまでは不安でした。

その後車で平泉に避難して、今に至ります。ここから車で5、6分位のところに実家があるので、今ではよく行き来してみんなで食べたり飲んだりしています。ここは温泉があつていいですね。



▲庭先から一望できる金鶏山



沖縄県

八幡万里子さん(室原)

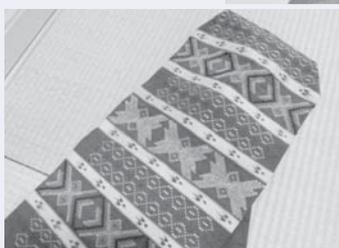
取材者：NPO法人まちなか研究所わくわく 宮道・下地
取材日：10月1日 「平成26年11月 広報なみえ掲載」夢は福島に戻って「琉球かすり」を
広めること

2011年3月末にご夫婦で沖縄に避難された万里子さん。避難してすぐに出会った沖縄の織物である「琉球かすり」織りを、現在も続けていらっしゃいます。「沖縄には娘夫婦もいて、かすり織りができて生活に不満はないけれど、ふるさと浪江への思いは消えません。気持ちは悶々としています」と話します。

■今も続けている「琉球かすり」織り
沖縄に来て習い始めた「琉球かすり」織りは、今も通って織っています。通常、織りの研修後は工房に入りますが、いつ福島に帰るかわからない私の立場を理解していただいている琉球紺事業協同組合の理事長に「帰りたいかったらいつでも言ってくれたらいいからね」と言ってもらい、組合に席をおいて織りをさせてもらっています。



▲ご自身で織った「裂織」作品と一緒に



▲万里さんが今後チャレンジしたい「南風原花織」

■ふるさとを思う気持ちは消えない
今は、福島県に帰りたい気持ちが強いです。友達が恋しい。でも福島県のどこに帰るのか？福島県内で住む場所を探したとしても、ご近所は知らない人ばかりだろうし…そんな不安があります。また、沖縄には娘夫婦、孫もいます。福島に帰ると会えなくなるので、それはさみしい。帰りたいという気持ちがあってもどうしたらいいのか…。

す。織りを習い始めた頃は、一日、織り機の前に座るのも辛く、かすりの模様が合わなかったりなど大変でしたが、やめたいとは思いませんでした。一反織りができ上がった時には感激して涙が出ました。昨年、二本松市で開催された「復興なみえ町十日市祭」でも「琉球かすり」を出展し、みなさんに見ていただきました。「琉球かすり」は薄くて軽く、模様がきれいでとても素晴らしいです。今後は、織る技術が難しい「南風原花織」にもチャレンジしてみたいです。

■今は夢の途中
沖縄の生活は幸せで、特に不平不満があるわけではないけれど、望郷の念だけはどうしてもありません。悶々とした気持ちはありますが、「琉球かすり」織りをやっているときは、この悩みから解放されます。いつかは、福島に戻って「琉球かすり」織りを続けたいという夢があります。誰に頼まれたわけではないけれど、「琉球かすり」織りをやっていくのは私の使命かと思っています。福島県内に家を建てて機織りしながら、「琉球かすり」を広めていき、また沖縄にあるたくさんの方のものを伝えたいです。今は夢の途中。夢を叶えられるようにがんばりたいです。

浪江に戻るわけではなく、毎日「どこにいく？どうする？」と同じような話をしています。結論がでないのは「もう少し辛抱しろ」「もうちょっとがんばれ」という神様の言葉なのかなと勝手に思ったりもします。でもやっぱりふるさとを思う気持ちは消えません。

ソフトボールチーム「浪江大吉SSB」

富沢 和正さん(権現堂)・木幡 健一さん(赤宇木)
平田 邦之さん(権現堂)・熊谷 徹さん(高瀬)



山形県

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田

取材日：10月5日 「平成26年11月 広報なみえ掲載」

ありがとう高島 4年目の感謝を込めて ～つながった絆をこれからも大切にします～

「ナイスピッチング！」浪江大吉SSBチームの活気のある掛け声が、今年も山形県高島町のグラウンドに響きました。チームの代表・松崎光平さんらが山形県高島町に避難し、やきとり大吉高島店店長の伊藤さんと出会ったことがきっかけで、高島町総合体育大会ソフトボール種目に出場するようになってから4年目です。「震災当時後押ししてくれた高島町の皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです」と、松崎さんとキャプテンの小桧山さんは話してくださいました。今回は出場したメンバーの皆さんにお話を伺ってきました。

◆チームへの想い、この大会への想い

富沢 この大会に出場するのは3回目です。今叔母が高島に暮らしており、一時的に祖母もこちらに避難していました。代表をやっている光平や祖母と、震災後再会したのもここ高島でした。こうして身近な人間がお世話になった所で、こういう機会を与えてもらっていることは大変ありがたい話で、なにか縁があるんだなと思います。この話をすると震災当時を思い出しますね。年に数回ですが、集まれ



▲お話を伺った皆さん
左から、平田邦之さん、富沢和正さん、木幡健一さん、熊谷徹さん

木幡 夜勤明けだったので、この大会を楽しみに来ましたが、今は、南相馬市に住んでいます。今は、まだお店も再開してないですし、楽しみがなく息抜きできる場もないので、こうやって皆でソフトボールができることは、リフレッシュできるので非常に楽しみにしていました。私にとってチームのメンバーは皆兄のような存在です。家族のような感じですね。メンバー皆にお世話になり感謝しています。

るのは楽しいですよ。ね。

平田 私は毎年申し訳ないなというか、ありがたいなという気持ちで出させていただいています。皆ばらばらになっちゃった中で、まさかまた町村大会が再開できると思っていたのが、この場で再開した時は嬉しかったですね。個人個人で会ったりはしていますが、メンバーに会えるのは町村大会とこの高島大会くらい。皆と会えることは本当に嬉しいですね。

富沢 今は仙台市で仕事をしており、ひとまず定年までは仙台でと考えています。私は、定年になったら浪江に帰りたいなと思っています。その頃には町も落ち着くのではないかなとは思っているんですけど、まあそれが一つの夢ですね。そしたらまた浪江でまた皆とソフトボールしたいですね。

平田 今は相馬市に暮らしています。震災後は、群馬県館林市にいて、昨年相馬市に引っ越ししました。先のことはまだわからないので、まだ決められない

◆これからの暮らしや進み方について

熊谷 震災当時はばらばらに避難し、また皆と集まり試合ができた時の嬉しさは半端なかったですね。今日も関東の方からこの大会のために来ているメンバーも何名かいます。この大会に参加させていただいているのも震災後からのきっかけで、こうしてまた毎年誘っていただける。この場がなければ皆が集まれる機会はないので、本当に高島の皆さんには感謝しながら、毎年、秋口のこの日を楽しみにしています。



▲今年は惜しくも準優勝



▲声を掛けマウンドへ

と思っと思っています。とりあえずは毎日精一杯に過ごすと、今年この大会に出させてもらい参加するだけでなく、何

か高島の皆さんに恩返ししなきゃなと思っっています。まだそこまでは考えられてない状況ですね。きっかけがあれば戻りたいなという気持ちはありますけれども。この時期は津島の紅葉はともきれいだっただことと思っ出します。また見たいですね。

メンバーは家族のように、もう近くにいるのが当たり前のよう存在です。こうして毎年集まれるというのは嬉しいし、こうした機会を大切にしながら、これからも参加していきたいなと思っいます。

木幡 就職と同時に南相馬市に出ました。実家は津島なのですが、今も線量が高くて入れない場所です。悔しい気持ちはあります。熊谷君とは高校の同級生で、近くの熊谷君の家によく遊びに行っていました。いつかまた皆で浪江町で飲みたいですね。皆さんいろいろ苦労して今過ごしていると思っますが、前向きに頑張りましょうとしか言えないです。ぜひまた皆さんと浪江町で試合をしたいです！

熊谷 正直なところを言うと、まだそこまでは考えられてない状況ですね。きっかけがあれば戻りたいなという気持ちはありますけれども。この時期は津島の紅葉はともきれいだっただことと思っ出します。また見たいですね。



左から、高島町ソフトボール協会会長 高橋さん、山形県議会議員 島津さん、副会長 菅野さん



やきとり大吉高島店 店長 伊藤さん



浪江町復興支援員山形駐在小松原さん、佐藤さん、渡邊さん

●高島町ソフトボール協会
会長 高橋英助さん、副会長 菅野康雄さん

高島町の協会としては、参加していただくのが当たり前になっており、「今年も来ていただきありがとうございます」という気持ちです。浪江チームは、動きも速いし元気もいい！この日だけでも一日楽しんでいただきたいと思います。これからも交流していきたいですね。また来年も会いましょう。待っています。

●やきとり大吉高島店 店長 伊藤健彦さん

Welcome.まほろばの里・高島町へ、ようこそ。
4年連続、高島町ソフトボール大会にご参加頂

き、誠に有難うございます。今年も、皆さんの元気な姿を拝見し、ほっとしているところです。充分な練習時間もとれないなか、松崎代表を中心としたチームとしてのポテンシャルの高さと、久しぶりに会った友人のように気さくに接してくださる皆さんの人間としての魅力を毎回毎回、優しく感じております。ユニホームを新調されドレスアップされた『新生・浪江大吉SSBチーム』を、来年も心よりお待ちしております。

●山形県議会議員（総合体育大会副実行委員長）
島津良平さん

全国に散らばった方々が集まり、高島で試合していただけるということは私たちも大変嬉しいことです。町長杯も復活したということで、高島の大会が活気を取り戻すきっかけになったのならと思っています。今年は交流のために芋煮会も行います。これからも町としてできることをしていきたいと思っいます。また来年も元気にお会いしたいですね。

●浪江町復興支援員山形駐在
佐藤真敏さん、小松原慶子さん、渡邊健太さん

ソフトボール競技は浪江町を挙げて盛んなスポーツで、歴史があります。チームの皆さん鍛えられており、これまで練習してきた成果がわかりました。個々のプレーがどのチームよりも勝っているし、活気がある素晴らしいチームでした！

お世話になっている方からコメントをいただきました！



五十嵐英明さん(請戸)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島

取材日：11月8日 「平成26年12月 広報なみえ掲載」

漁師として生き、 請戸の漁業の伝統を若者に伝えたい

3代続く漁業家で、震災前はほっき貝を漁獲していた五十嵐英明さん(66歳)。現在は奥さまと2人、南相馬市の借上げアパートで暮らしています。漁業が再開できない現状に悔しさをにじませつつ、「町が復興し、若い世代が漁業の伝統を引き継いでくれる未来」を見据えた取り組みが必要と話してくれました。



▲原ノ町駅近くの市立図書館の庭にて

■九死に一生を得たあの日
請戸に住み、15歳の時から漁に出ていました。浪江で一番の思い出は、漁業の仲間たちと年1回、家族旅行を楽しんだことです。しかし、一番若かった仲間が震災の犠牲になり、未だにご遺体も見つからない。なんともやりきれない思いがします。震災当日は、私も九死に一生を得ました。保育園と小学校に通っている孫たちの無事を確かめた後、家内と一緒にいったんは車で逃げたけれど、「津波の高さは6メートル」という放送を聞き、油断して自宅近くに戻っ

た時、津波に襲われました。黒い壁のような波が押し寄せ、あつという間に流されました。なんとか助かったのは、請戸川の岸に建っていた二階家の屋根に上ることができたから。救助隊に助け出されたのはその日の夜で、30分遅かったら命がなかったと思います。目の前で流されていった人もいて、そのことを思い出すのが一番辛いです。避難先のいわき市で家族と再会したのは5日後の3月16日。家内は私の死を覚悟していたし、私も家内は助からなかったかもしれないと思っていたので、心底ほっとしました。その後、長女の住む茨城県古河市で2年ほど暮らしましたが、仮設住宅の申込みに当選したのを機に南相馬市に移り、今年の8月から南相馬市原町区の借上げアパートに住んでいます。

■風評被害の払拭に向けて
南相馬市に移転したのは、浪江に少しでも近いところに住み、体が動くかぎりは漁師として暮らしたかったからです。けれど原発の汚染水問題の影響もあって風評被害がひどく、漁業再開のめどは立っていません。漁師仲間と時々会って話をしますが、みんな本当に悔しい思いをしています。明日、小名浜の魚市場で風評被害を払拭するためのイベントがあるんです(11月9日に開催された「いわき魚まつり」。試験操業で獲った魚を、モニターング検査をして「安全です」と分かってもらった上で皆さんに味わっていただく。こういったイベントを福島県だけでなく、全国で開いてほしいです。全国の漁協が協力し、国が予算を付けるといった仕組みも必要だと思います。そして漁業関係者も今以上に勉強して、安全性をきちんと伝えられるようにならなくちゃいけない。最大の課題は風評被害の払拭です。請戸は、江戸時代から漁業で栄えた歴史があります。そんな故郷に将来、若者が帰って来てくれた時、何もない町では困る。漁業をやりたい若者がいたら漁師として生きていけるよう、私たちには伝統を残し、下地を作っておく責任があると思っています。そして浪江に戻りたい町民が安心して暮らせるよう、復興住宅や生活環境の整備も進めてほしいと願っています。



宮崎県

佐藤 啓子さん(棚塩)

取材者：NPO法人おおむた・わいわいまちづくりネットワーク 彌永
取材日：11月1日 「平成26年12月 広報なみえ掲載」

浪江の皆さん、 私たちは九州で元気に過ごしていますよ

佐藤さんご一家は、宮崎県宮崎市で三世代8名+愛犬のクーちゃんと暮らしておられます。「浪江のころ通信～震災後3年間の記録～」を暗記するほど毎日読んでおられるお父様をはじめ皆さんから、とてもこの紙面には収めきれない沢山の想いを聞かせていただきました。

浪江では、権現堂の東邦銀行の向かいで公文式の学習塾を開いていました。幼児から高校生を相手に、大好きな仕事でした。3月11日、次女と二人で近くのヨークベニマルで買い物をしていたら、これまで経験したことのない大きな地震が来ました。その時は、津波とか原発の不安は全くなくて、家にいた両親は大丈夫か、地震の被害で、もうこれまでと同じような暮らしはできないのだろうか、と考えていました。幸いにも、当日のうちに家族の無事は確認できまし



▲お母様(陽子さん) お父様(忠夫さん) 啓子さん
クーちゃん お姉様(松田香さん)

たが、避難所で父の体調が悪くなり、薬の入手も大変だったことから、まずは少なくとも薬が手に入るところへ、そして子ども達を放射能の被害から守りたいとの思いで、姉が嫁いでいた宮崎へと避難することになりました。吹雪の中を出て、3月19日、東京駅に着いた時は、着の身着のまま。柱の影に固まって、子どもたちは何も尋ねず、泣きもしなくて、それが余計に心配でした。公文の生徒たちには震災直後に電話をしましたが、全員と連絡が取れたのはもっと後です。しばらくは、公文の青い看板を見るのも嫌でした。10年間心血を注いで、人と人の信頼を築いてようやくできてきたことが一瞬で無くなってしまい、心をもぎ取られたような気持ちでした。震災から一年過ぎたころ、ご縁があつて宮崎の公文の教室でお手伝いに入りました。やってみると、子どもたちの学ぶ姿に、また心に火のついた感じになり、2013年4月に、宮崎で教室を開くことにしました。

宮崎で仕事も見つけ家も建てましたが、浪江に帰りたいという想いはどんどん大きくなっていきます。先日は、昔からの友達が訪ねてきてくれました。どこかへ観光案内しようと思つていましたが、結局、ひたすら取りとめのない話をしていました。友達が帰るとき、「また来るね」と言ってもらったけど、なんだかまた一人ぼっちになつてしまったような気持ちです。子どもたちも環境が大きく変わってしまったのに、この間よく頑張つていたと思います。ただ、一度、元の学校の担任の先生から電話をいただいたことがあり、その時は、子どもたちは電話口ですつと泣いていました。親の前では泣けないんだな、とも感じました。子どもたちには、震災に遭つたからと、何か特別に頑張るとかいい子になることはしないでいい。普通の子どもの暮らしをして欲しいと思つています。



山形県

佐藤 博美さん(北幾世橋)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田

取材日：11月5日 「平成26年12月 広報なみえ掲載」

子どもたちの成長を近くで見ることができる幸せ 私が頑張ることができる原動力です

息子・翔くん、娘・綾ちゃんと共に山形県中山町で暮らす佐藤博美さん。夫・勝文さんは、現在、福島県内に単身赴任中です。泣いて悩んで考えて、でも前に進まなくてはいけない中、まず心にひとつの区切りがついたのが昨年3年目だったそうです。この3年間で、翔くんは勝文さんの背を、綾ちゃんはおばあちゃんの背を超えるくらいに成長しました。佐藤さんが、日々の中で子どもたちの成長を見守り、家族を大切に思う気持ちが伝わってきました。

翔は、山形の高校に進学し、野球部でレギュラーを目指し頑張っています。昨年は今頃は、どこの高校を選ぶかとても悩みました。元々、3年を目安に福島に戻ると話していたこともあり、選択肢に福島もある、でもここにいたいという気持ちで過ごしてきたのだと思います。そんな時遠征先のいわきで、スポーツ時代ずっとバッテリーを組んでいた友達と対戦する機会がありました。相手のチームでなくてはならない存在として頑張っている彼の姿を見て、自分も山形で頑張る覚悟を決めたように感じました。浪江で積み上げた



▲博美さんと綾ちゃんと一緒に

ものを無くしてここからスタートというのは、子どもなりにも辛かっただろうと改めて感じた時でした。避難当時、友達と小学校の想い出話もできず、中山町の話を聞かされてもわからなかったことが、一番の心の傷だったようです。でも、ありがたいことに今は同じ中学校野球部を卒業した先輩に大会などで会うと声をかけてもらえるようになったから、ここでの3年があったからこそだと嬉しく思っています。

綾は、ミニバスケットボールのスポ少で頑張っています。この家に越してきてから一人部屋ができたので、友達を連れてきて遊ぶことができるようになりました。「幾世橋のおうちみたい」と言います。中山町の方から助けていただいて、何の不便不安もなく学校生活を送らせてもらっていることが一番安心してるところですね。

私は今、綾の通う小学校で絵本の読み聞かせ活動に参加しています。本一冊でも伝えられることは大きく、本で自分の思っていること、気持ちを伝えることもできます。浪江でもこうした活動をしたかったですね。いろいろな出会いや経験があるこ

とにとっても感謝しています。そして、今でも年1回開催している幾世橋小「再会の集い」は、震災当時に在学していた子どもたち皆を卒業させたいという先生と親の想いが一緒になり、続けていくことができ、協力してくださるすべての先生方に感謝しています。

10月に行われた町長杯(家庭婦人バレーボール)では、「きよはし」が優勝しました!このチームに戻ると、浪江で生まれ育った自分でいられるような気がします。こうして時間も過ぎると、穏やかに生活できてはいませんが、どんなことがあっても、浪江町民だということは忘れることはないし、無くすことはありません。言葉ではなかなか表すことができないのですが、どんな状況でもその気持ちがあるから頑張っていけるといふのは皆さん同じではないかと思えます。

今は、浪江や福島に戻ること考えることは留めておきまします。のびのびやりたいことを思いっきりやらせてあげられる山形で、子どもたちが納得するまでそばで見守っていければと思っています。



吉田 亜美さん(権現堂)

取材者：NPO法人くびき野NPOサポートセンター 新保
取材日：1月17日 「平成27年3月 広報なみえ掲載」

言葉の力で誰かの助けになりたい

現在、新潟県柏崎市内で家族と一緒に生活を送っている亜美さん。4月から、福島県内の高校に進学する予定です。今回は、柏崎市内の「共に育ち合い(愛)サロン むげん」で日々の生活や「わたしの主張 柏刈地区大会」に登壇した際のお話を伺いました。



▲お姉さんの桃子さんと一緒に
(左：桃子さん、右：亜美さん)

■震災発生から柏崎市内での生活

震災が発生したのは、小学5年の3月でした。まず実家に集まったのですが、避難が必要な状況になり、母と姉と一緒に新潟県柏崎市に避難してきました。柏崎市での生活で一番驚いたのは、雪です。浪江町では雪が降らなかったのですが、こちらの冬は今でも慣れません。また、隣の長岡市の大花火大会へ行ったのがとても印象に残っています。今日取材を受けている「共に育ち合い(愛)サロン むげん」さんは、こちらで復興支援員を

している姉を通じて出会いました。学校生活がうまくいかなかった時など、ここで過ごしていたこともあり、いつもパワーをもらっています。

4月からは、福島県内の高校へ進学することになりました。また家族が離れ離れになってしまいましたが、福島へ戻りたいという気持ちがあるので頑張りたいです。

■母への感謝と言葉の力を伝えたい

「わたしの主張 柏刈地区大会」でスピーチし、昨年、「わたしの主張 柏刈地区大会」に登壇し、奨励賞をいただきました。

テーマは、「強い思いは言葉とともに」。友人とのすれ違いから学校を休みがちになった時期に私の背中を押してくれた母への感謝と、「言葉の力」についてスピーチしました。

当時学校を休みがちになってしまった私に、母は『嫌なこと、怖いことを恐れ、逃げている自分があるよ。そんな自分を見つめ、受け止めなさい』と言いました。私は心の中で『何も知らないくせに。わからないく

せに……。自分でもちゃんと考えている。頑張っているのに。これ以上踏み込まないで』と疑問に思いました。

そんな私に向かって、『大丈夫。できるから』『亜美が思っていること、そのまま言葉にしているんだよ。相手にちゃんと伝えて、前に進もう』と声をかけてくれた母。

この言葉をきっかけに、すれ違っていた友人に思いを伝えるため、泣きながら何度も言葉を口に出す練習をしました。少し時間はかかりましたが、自分の思いを友人に伝えることができ、母の一言に背中を押され一歩前進することができたと思っています。

母の言葉には、言葉の力強さを感じます。「ありがとう」という、たった一つの言葉にも、感謝や気遣いの気持ちが伝わっています。

これからもたくさんの人との出会いがあり、また悩むことがあるかもしれませんが、自分なりの伝え方で、「思い」とともに言葉をつないでいきたいです。母の言葉に助けられたように、自分の言葉が誰かの助けになればと思います。



茨城県

古場 泉さん・容史子さん(幾世橋)

取材者：浪江町復興支援員茨城県駐在 田中
NPO法人茨城NPOセンター・ commons 横田
取材日：1月18日 「平成27年3月 広報なみえ掲載」

みなが集える場をつくり元気に過ごす

古場さんご夫婦は、原発災害により、息子さんのいるつくば市へご夫婦で避難しました。そして、あるきっかけから、つくば周辺に避難している方の集まる会を主宰するようになったそうです。



▲新年会のステージで演奏する古場さんご夫婦と息子さん

■手探りでつくった交流会
避難当初は、つくば市が主催する「避難者交流サロン」に参加していましたが、「皆でもっとおしゃべりができる場所が欲しい」という声があがり、知人からもそういう場を作ってほしいとの要望がありましたので、なんとかしたいと考えていたとき、地元のスーパードが行っている「私の企画応援します」という募集記事を偶然見つけました。そこで浪江町出身の民謡歌手「原田直之さん」をお招きし

■今後に向けて
最初は、つくば市に避難された方を中心とした会でしたが、会の情報を聞きつけたつくば市民の皆さまや学生さん達、さらにはつくば市外へ避難された避難者の方も、新たにしゃべり場に来てくださるようになり、たくさんのご縁が繋がってきました。

ての交流会の企画を応募してみたところ、残念ながら企画は不採用でしたが、原田さんからは出演の了承も得ていたので、自力で開催することにしました。浪江町の協力を受けるために自治会を作ろうと、「元気つく場会(いい仲間つく浪会)」という会を立ち上げ、平成24年6月から活動を開始しました。原田さんの交流会は同年9月に実施でき200名参加と大盛況で、現在も毎月、茶話会を中心に、様々なゲストを招いて避難者同士や避難先の地元住民と交流できる活動を継続しています。安心して参加できる楽しい交流会にすることを心がけ、しゃべり場に加え、体操、音楽などいろいろな方の協力をいただきながら企画し、時にはバスツアーなども実施しています。



▲今年1月の交流会の様子

「少しでも明るい話題で語り合い、元気を分かち合える場を作ろう」という想いで、住み慣れた家を離れた人同士心の絆を深めつつ、避難生活のさらなる安定の一助になればと思っています。
「元気つく場会(いい仲間つく浪会)を通じて、いろいろな人が出会えるよう、今後も仲間を増やしていきたいと思えます。多くの皆様のご参加をお待ちしておりますので、ぜひ、私たちの会にお立ち寄りください。」

